

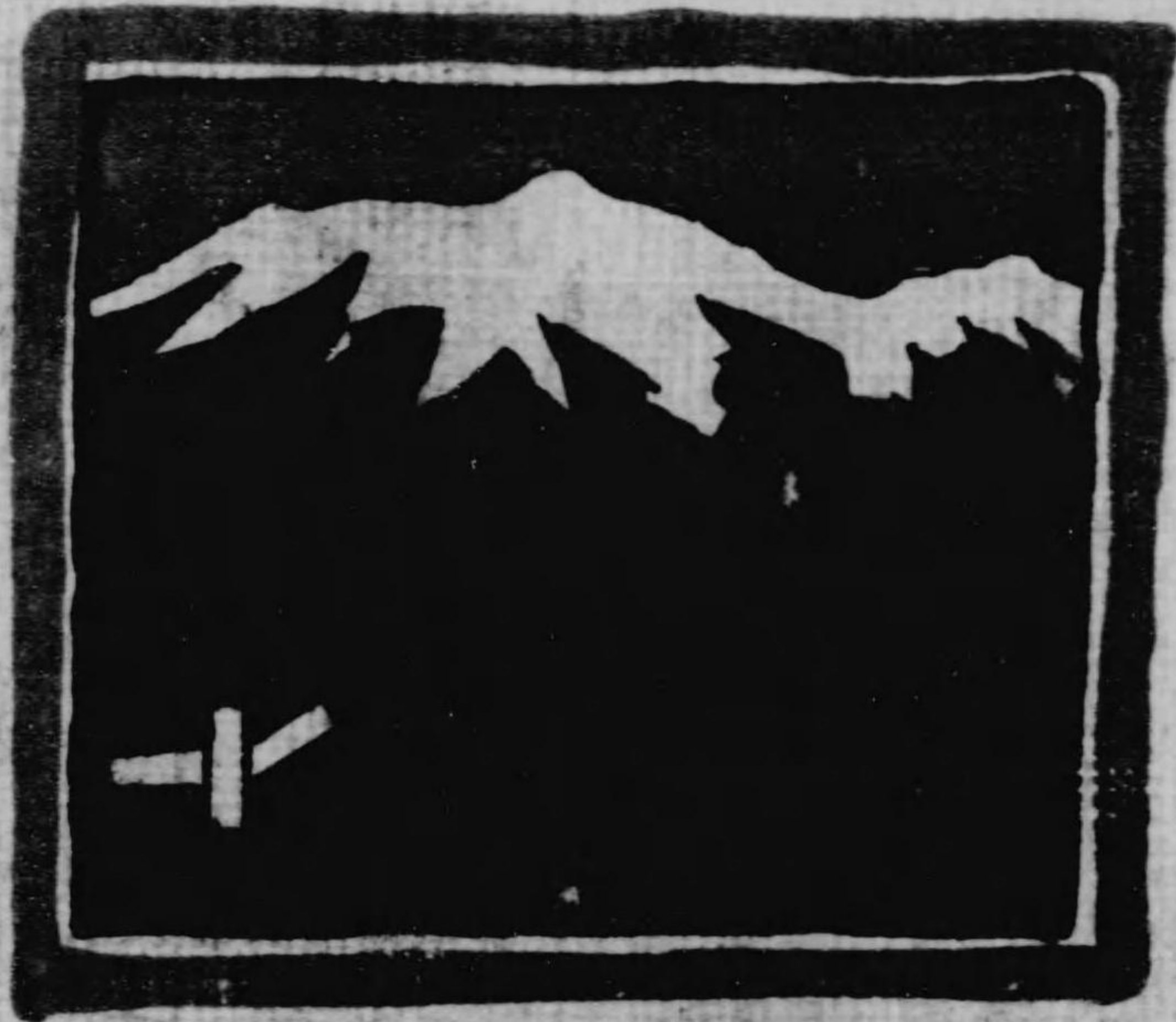
364

232



始

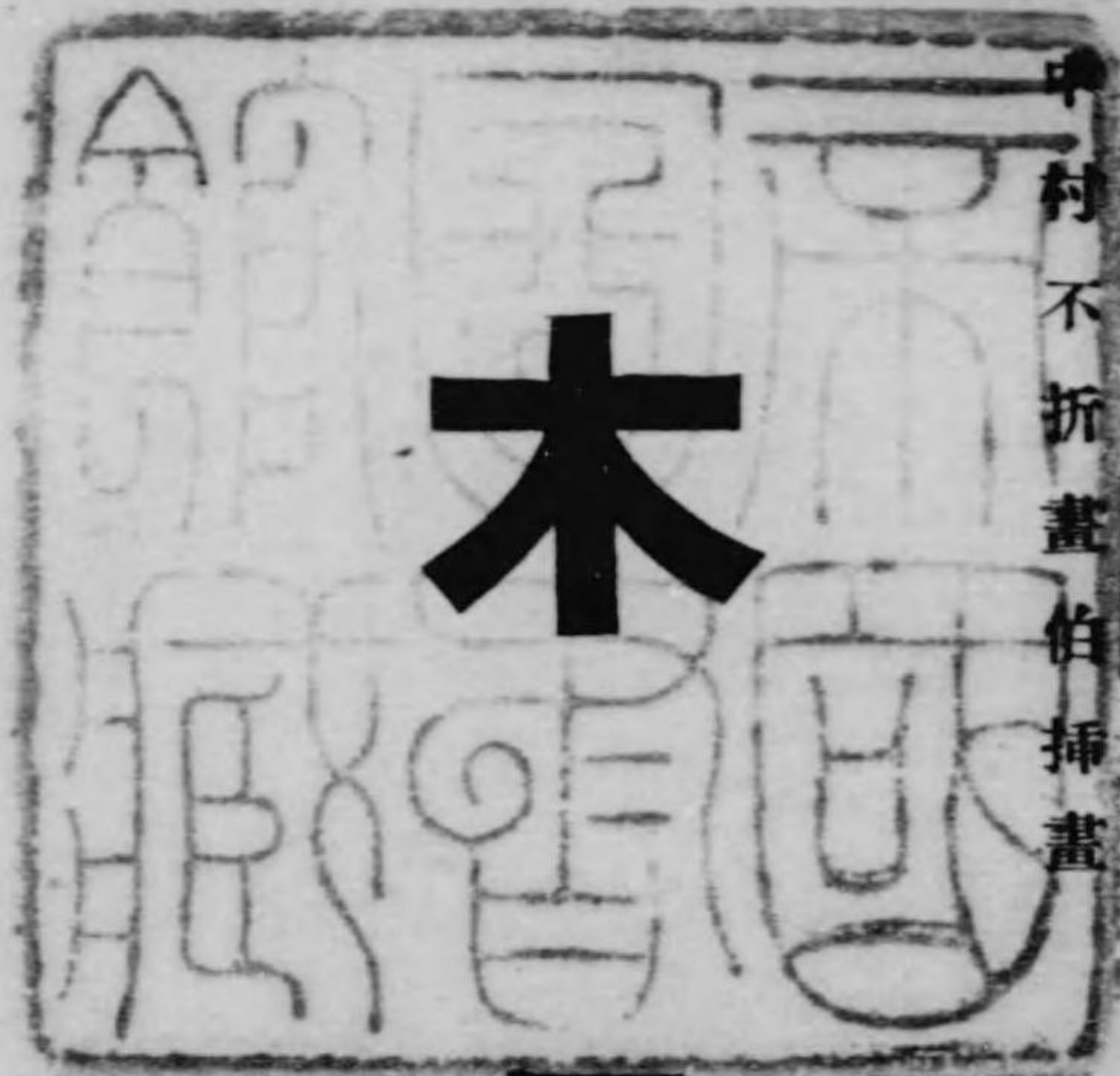




木曾

丸山梓水著

364-232



木會

赤星長野縣知事題字  
島崎藤村先生序文  
本多林學博士序文  
中村不折畫伯挿畫

丸山梓水著

大正  
6. 7. 27  
内交

藤森至誠堂發行

木會

序の言葉

山嶽と森林と谿谷との偉大なるものより、奇花異草の微細なるものに至るまで、みな納めて文章とすべきことを教ふるものは、實にわが故郷なり。

島崎藤村

## 序

自然の山水風景は天斧の工を以て成れる一大藝術であつて、到底人工の微を以て之を加減し得るものではない。幸なる哉我國は此點に於て天惠豊富外國人でさへも品して以て我國を天然の公園也と謂つて居る位で、古來我國民は眞にその明媚なる山水を楽しみその優秀なる國を愛して來た。

乍併吾人は我國民が眞にその山水風景を利用する

道に就て從來あまり多くを考へて居なかつたのを遺憾とする。

これを海外に就て見れば彼の瑞西や伊太利や乃至佛蘭西獨逸の如き、何れもその山紫水明を利用し、一方盛んに外客を誘致して優遊自適の享樂を恣にせしめながら、他方自國の爲めに之を利して居る所は随分共に顯著なるものがある。されば由來割合に貧乏なる我々日本人はこの天惠の一大資本に對し十分に之を利用するの途を講ずることを等閑に附しては

正に天意に反くものと謂はざるを得ない。

抑も天然山水風景の美たるや只一二回往來の客が僅少の時日を割いて之を眺望賞觀しただけでは決してその全體の眞價を知る事は出来ないものであつて、晨に夕に雨に雪に又春に秋に其時と場合とに従つて夫れ夫れ特色のある風景美を呈するものである殊に一般人のあまり多く注意しない夜間乃至冬季に於て却つて意外の好風景を現はすことさへある。こんな理由によつて眞個に且つ精確に或風景の鑑賞の

出來得るものは、その地方に永住した人でなければならぬ。

そこで或風景に就いては常に日月晨星の變化や風霜雪の變化に對して親しく接見し又四季折々にふれて植物や岩石や溪泉によつて起る微妙な變化に對して科學的の觀察を遂げた上に、更に該地方の風土習慣人情歴史傳記に至るまでも遺憾なく研究し、そしてそれ等の總てを背景として鑑賞審美したものでなくては勿論眞にその風景美を究め盡したとは言へ

ぬ。吾輩は此意味に於て地方人士が各その郷土に於ける名勝地に就いて眞面目にして周到なる研究を發表されん事を深く希望して居る所以である。

天下に冠たる木曾の風景美は今更めかしく紹介する迄もない。文人墨客の筆によつてその名聲眞價は古來普く知れ亙つてゐる、しかも吾輩は前述の意味に於て此梓水氏の文が最も完全な理想的の新らしき木曾案内書たる事を斷言するに躊躇しない。吾輩は茲に本書を世に推舉すると共に本書が汎く此種の企

の導火線たらんことを切望して已まないものである。

大正六年六月十二日

林學博士ドクトル 本多 靜 六

## 自序

名所案内とか遊覽地解説とかいふ種類の書物は、  
これまで各地に随分澤山に出版されて實に汗牛充棟  
もたゞならざる程世に行はれて居るのであるが、そ  
の多くは孰れもみな通り一片のもので、その土地の  
地勢とか産物とかいふ統計的のことばかりか、てな  
ければ沿革などに關する篇年史的のことばかりが並  
べられて、頗る無味乾燥のものたるを脱しえないの



は甚だ遺憾とするところである。

元來名所とか遊覽地とかいふものは、その地の景色に特色を有つて居るとか又は歴史的事蹟に富んで居るとかいふのが本來の生命であるのであるから、斯うした案内書解説書のやうなものは一夜二夜の客に對しては種々の便宜ともなり満足と與へることになるのは勿論であるけれども、それ以外自分等が實際に遊覽客として三日なり五日なり一つの土地に滞在する場合に於て、その土地の人情とか土俗とかい

ふものに立入つてその人民の精神生活に相當の理解を持つといふことは、後年になつて迄長く當時を回想して言ふに言はれない懐しみを覚えしむる効果のあるものであることは、多くの人の經驗に於て一致して居るところであらう。

信美兩濃の間に、山と天との間に介在する木曾の谷の如き、人間の頭數から見れば五萬足らずの僅かなものではあるが、その僅かの人間に就て世の物質文明を全く離れた此谷ならではの見出し難いやうな人

情があり風俗があり、又この特殊な人間の生活を演ぜしめるところの舞臺に至つては、更に無限といふ時の巨匠が作り上げた藝術のうちでの最も放膽なものが隨所に發見されて、假令ば春の若葉の香りにも又秋の紅葉の色にも前人未知の世界が擴げられて居るのである。此の書は自分が此谷の自然と人生とに親しみを交へた二年の間の純なる感情を現はしたもので、記事の内容をば特に前に述べたやうな願ひを満たす爲めに意を用ひたつもりである。

世を益し人を利するやうな眞正な案内書を作ることは最も困難なことではあるが、若し今後斯ういふやうな意義を持つた案内書が各地に於て刊行されるやうなことになるれば少くとも多くの遊覽者旅行者をして今迄よりはもつと愉快な旅行を續けしめうるに至るべきことだけは信じえられることである。

大正六年初夏

福島の寓にて

著

者

# 目次

若葉青葉	.....	一
中央線 上	.....	一一
中央線 下	.....	一一
避暑地 上	.....	二一
避暑地 下	.....	三九
日本一の檜林 上	.....	四九
日本一の檜林 下	.....	六三
信仰の山	.....	七五
御嶽山由來記	.....	八七
木曾川	.....	九五
	.....	一二九

木曾駒	.....	一四五
觀楓と燒鳥	.....	一五五
大將軍	.....	一六七
徘徊趣味の木曾	.....	一七九
原始的生活	.....	一八九
木曾の文學	.....	二〇一
藤村の木曾谿日記	.....	二一五
木曾美人	.....	二二九
木曾みやげ	.....	二四一
木曾ふしと踊り	.....	二四九
統計上の木曾	.....	二六五

目次終



(一ノ瀬八音木) 床の壘線





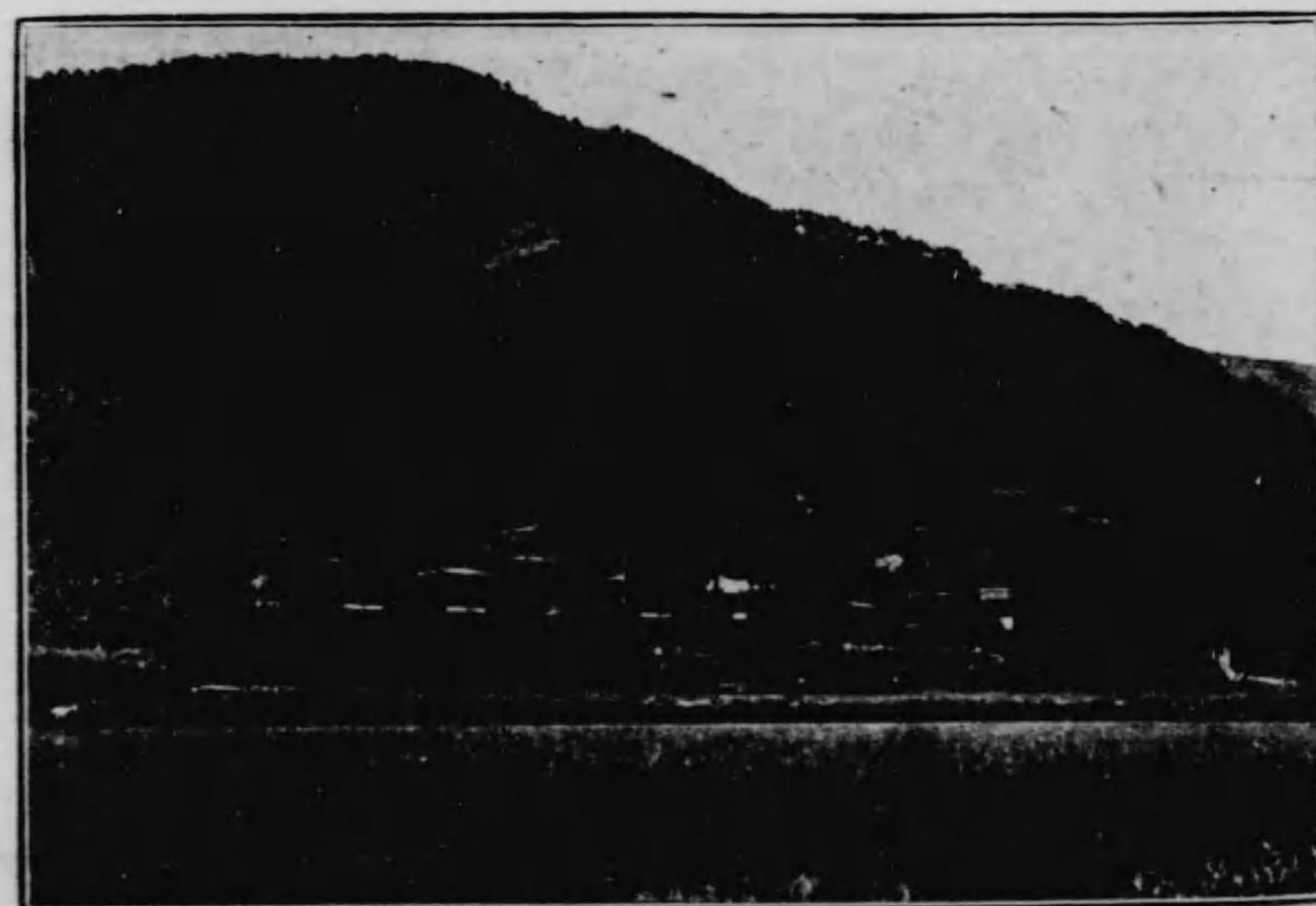
小野の瀑布(木曾八景之二)



(五の景八曾木) 照夕の嶽ヶ駒



(三の景八曾木) 雪暮の山嶽御



(六の景八曾木) 鐘晩の寺音徳



(四の景八曾木) 霞朝のしはけッ

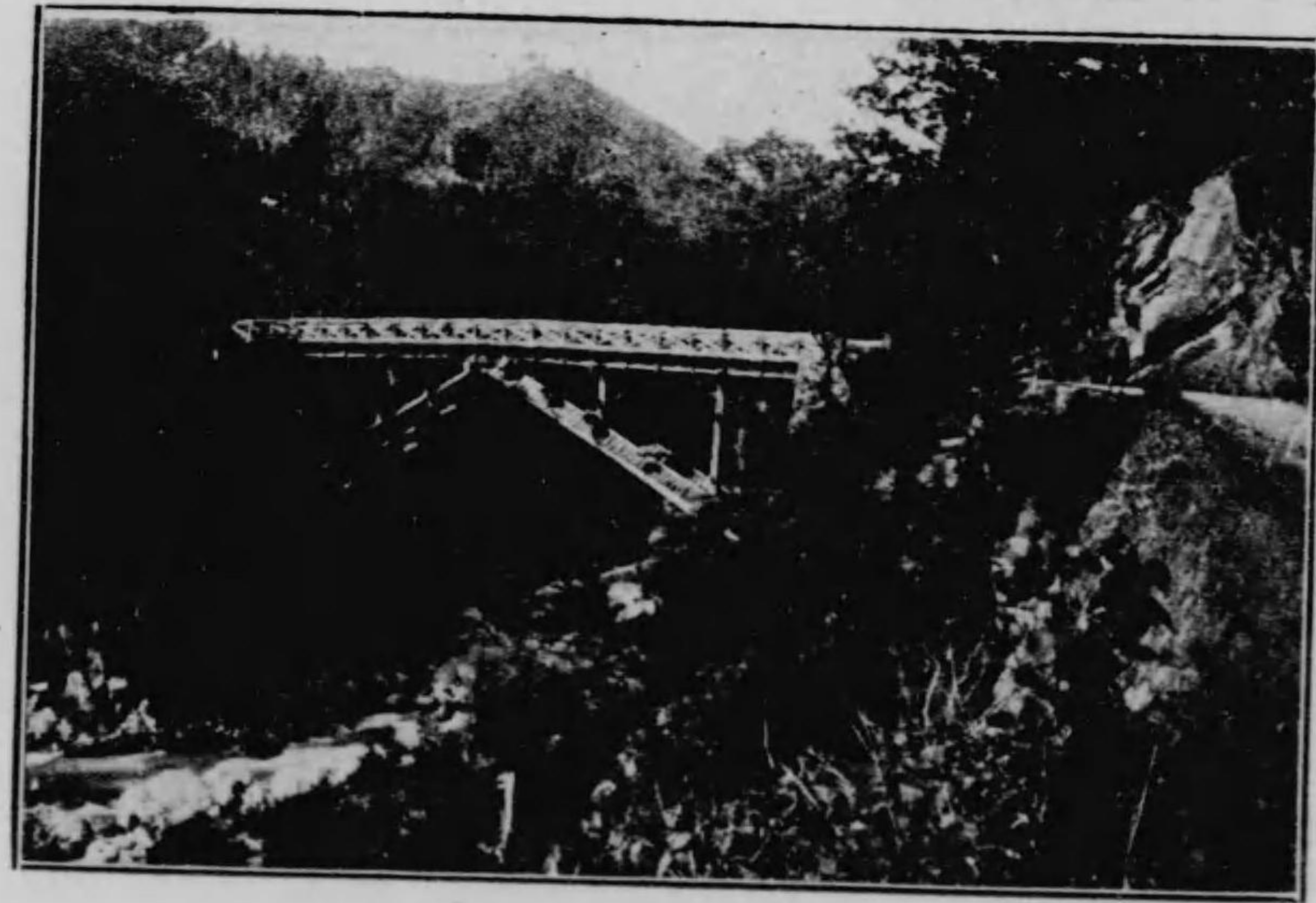
若  
葉  
青  
葉



木曾路の初め



與川の秋月(木曾八景の七)



風越の晴嵐(木曾八景の八)

白雲や若葉青葉の三十里——自然が試みたる最大の藝術——神秘的な夕暮の景色  
——之は特に此谷の人々のみが天より賦與せられたる貴きプリビレッジなり

白雲や若葉青葉の三十里

こは子規が木曾の初夏の緑を詠んだ句である。實にもよく言ひ現はされたる景色かな。白雲は心なくして谷を出で、谿に入り、三十里のその間、若葉を包み青葉にかくれ揺々として日に輝き風に薫つてゐる。思ふに木曾の新緑ほど清秀にしてしかもその規模の尨大なものは天下餘り類を見ないところであらう。世人多くは木曾の紅葉を稱して天下第一の壯觀といふ、或はその絢爛の美豊艶の情に至つては秋紅の燎々たるに及ばざるものこれあるべしといへども、その



清楚透澄の氣に於ては何者もこの新緑に及ぶものあるべくも思はれない。蓋し此谷、東櫻澤に起つて西賤母御料林に到るまで、峰巒谿谷、忽ち起ち乍ち伏して層々疊々、地を敷くこと實に百十四方里、佳木葱籠として谷を蔽ひ豊艸綠縹として野をうづむ。實に自然が嘗て試みたる藝術のうちの最大にして最も放膽なるもの、一たるに背かざるものといふべきである。若しそれ朝に早く覺めて樓に立ちて佇むときは、曉霧の模糊として煙のごときが心地よく肌を裏むがうちにも、清くなつかしき若葉の薫りは絶えず軽く爽やかに身邊に運ばれて、宛ら夢の裡に立つてゐるかのやう、やうやく霧去つて朝暉輝けば遠近の山は俄かに眠りから覺めたるもの、やうに、或は翠に

或は藍に紺に群青に様々の色に映發する、それは恰も不思議な神祕が魔力の手を擴げてあらゆる示現を目の前に現出して居るもの、如く、到底これを單なる水蒸氣の飽和量や塵埃の多少によつて日光の分解された作用などに歸せしめることは餘りに勿體なくて耐え得られないことである。やがて日が高く上るにつれて森は深く呼吸し谷は躍動して静寂のうちにも生々とした大氣の旋律を感じるやうになつてくるとその頃から氣まぐれな白雲が、すべり出すやうに何處ともなくあらはれて的もないやうにぶらつき始める。夜明けから日の登るまで、日が上つてから薄闇の谷を蔽ふまで、吾等人間はたゞ此の世の中で最も小にして最も力弱きものなることを感ずるもの、如

くにして立つて居らなければならぬ。凡そ青葉に輝く烈日の光の如何に美しくして崇高なものであるかは旅行家や美術家の齊しく経験して居るところであらうが、それが木曾の山中に於ては一層雄大で一層神秘的であるのである。殊にこの谷には到る處に風を起すやうな飛瀑があり谿流があつてその爲め谷には藍氣が躍動し樹木には生色か潑瀾として一枚一枚の葉末から、日光を通した水々しい生氣が流れ出すやうにも思はれる。それ故に如何なる草木の繁みにも爽やかな風が動き如何なる谷間の岩影にも生々とした大氣が漲つてあらゆるものが皆それ々の生を樂しむものゝ如くに榮えてゐる。木曾谷が近來避暑地として推賞されるのも實に此の點に存するのであ

つて、普通には斯の如き藪澤の通有性として、陰鬱朦朧な空氣が凝滞して人をして一種の悒鬱性に陥らしめるものであるにも係らず、此谷に於てはそれが却つて人の心を引立たしめ憂慮と苦痛とを忘れて、大きな美しき自然のうちに、自由な拘束されざる幸福な自身を見出さしめるに至るのである。吾等は避暑地の項に於て稍具體的にこのことに就いて述べて見たいと思ふが故に、今は直に飛んで此谷の夕暮れについて幾分の敘景をして見たい。

曩に吾等はこの谷の朝と晝とについて、この谷が他の如何なる山や谷のそれよりもすぐれて生々として居るかを述べた、そしてそれを述べるために餘りにとつときの形容詞を使ひ過ぎて仕舞つたこと

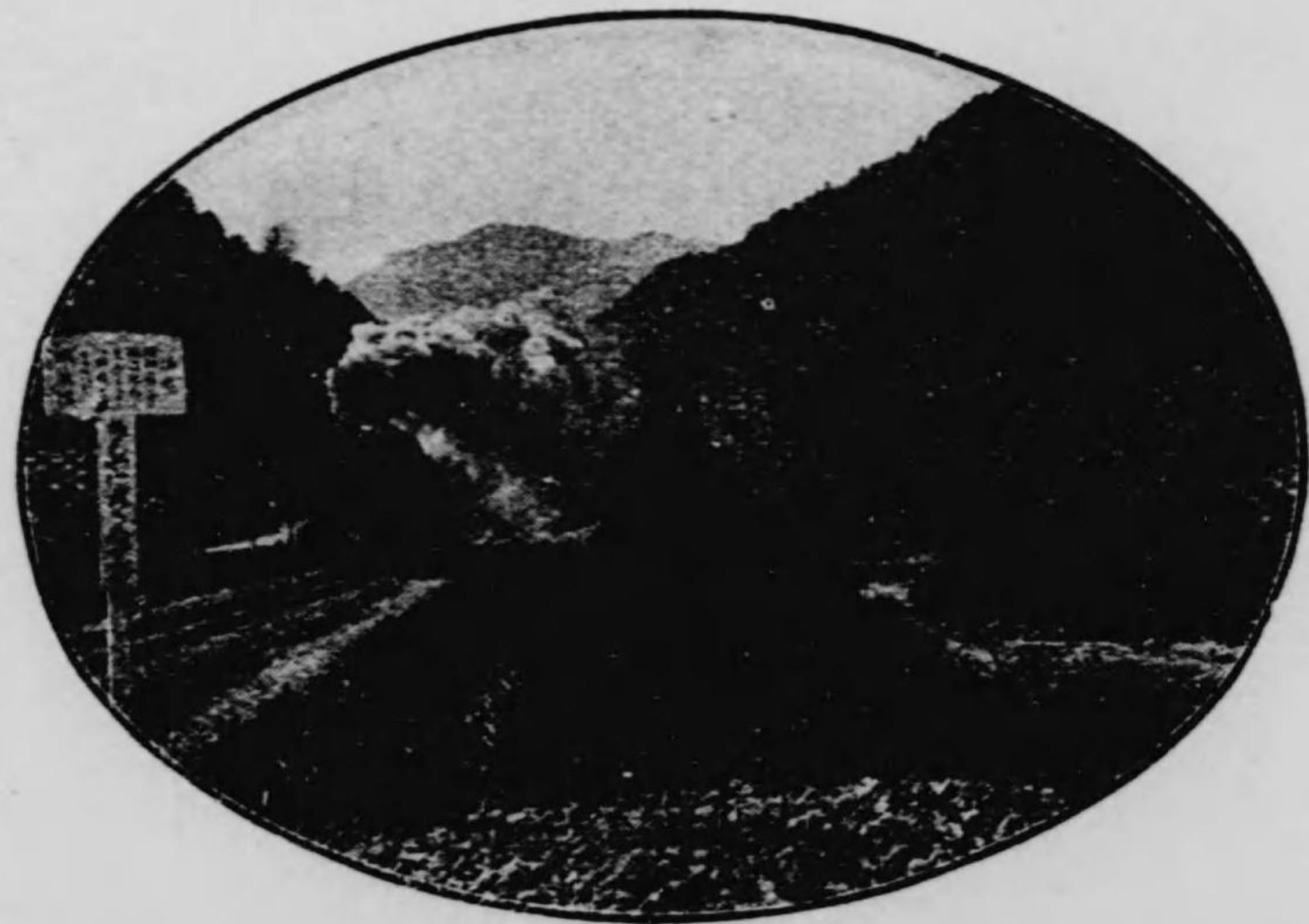
を今になつて悔いなければならぬのを遺憾とする、神祕的本會の特色は實はこの夕暮れの數時間の間に於て遺憾なく發揮される、若し黄金のやうな時刻とか或は詩のやうな世界とかいふ文字が本當の描寫であるとしたらばそれは疑ふまでもなくこの谷の夕暮れの數時間、夕陽と淡い霧とに包まれた本會谷の世界を言つたものに違ひは  
あるまい。

まづ斯うした幾つかの折重なつた小さな谷の夕暮れはこの僅か三四時間の間に千態萬様の變化をする、然しながらその變り方が際立つて人目につくやうな性急なものではなくて、すべてが和かいおつとりとした氣持のうちに如何にも手際よく次から次へと幾つかの場

面が展開されるのである、先づ日の蔭つた山、その山にしても日を背に負つた山と日を仰ぐ山と、遠い山と近い山と、急峻な山と緩やかな山と、それらにはみな夫々の言ふに言はれない異つた氣分がある、それから半ば日を受けて半ば日蔭になつた山、頂上だけが僅かに日を受けてゐる山——この谷の幾つかが全く薄闇に包まれてからもなほ赤々と輝いてゐる山——みなそれらの變化がこの僅かの間に思ひくに行はれる、すべて何百何十といふ數え切れぬ様々の場面が空間的にも時間的にも幕なしに而かも僅かの瞬間も休むことなしに次ぎく々と展げられて行くのであるから全く吾々の想像の範圍を越えて自由で輕妙である。

然しながらこの夕暮の數時間に於てこれらの自然が展開するところの輕妙な變化よりも、もつと直接に吾等の第六官を通じて深く入り込んでくるところの大氣がある、それは眞に不可思議なる大氣の感觸であつてこの氣に包まれて立つときは吾等は茫乎として、自身呼吸することの外にはたゞ一種の感謝の心持を感ずるのみである、眞にそれは言ひ表はすことの出来ない自由な健全な歡喜の心持であつて、鼻は若葉の香を嗅ぎ、肌は柔かなる薄闇の光線を感じ、視覺も聽覺もみなそれ／＼この和かく美しき自然の何物かを感得して居るのであるけれども、いまは全く融然として一つの歡喜の情に溶け合つて仕舞ふのと言ひ知れぬ感謝の心持に感じて居るのである。

日が全く沈むと今迄残りの映照を止めてゐた斬雲が何處ともなく影をひそめて暮色蒼茫、長い間低徊してゐた夕闇は忽ち慌しい暗黒の谷底に吸ひとられて鉛のやうな重い冷たい空氣が何處からともなく流れ出す、その頃から山を周り谷を貫いて趨る峽底の溪流はやうやく夜の世界を支配するものゝやうに潺緩の響をあげると、山や木立は怪物のやうに闇の靜寂を守つて突立つてゐるのである。



飯 盛 山

中  
央  
線  
上

中央線の使命——中仙道と中央線——中央東線の遊覽地——猿橋甲府——富士見  
高原——諏訪鹽尻——六萬石の松本平

東京萬世橋と名古屋とを結び付くる二百五十三哩の中央線は、萬世橋から一百四十五哩を西北に走つた鹽尻驛で東と西に分たれて、一を中央東線と呼び他を中央西線と唱える。

萬世橋驛は東京市の中央往昔の神田眼鏡橋であつて江戸文明の中心地、また名古屋は黄金の鯨鉾によつて疾くより般賑を極めたる中京の地、その二つを結ぶに揃ひも揃つて甲信美州といふ千山萬嶽のたたなはる中を選んだのであるから、そこに随分面白い皮肉もあれば矛盾もある、然しながらこの鐵道の出來上つた理由はさうした閑人の詮鑿に任せるよりも、軍事上東海道の裏木戸といふ立派な使命を帯びて居るのであつて、その爲には五十幾つといふ多數の隧道も

何百といふ鐵橋も更に意とせずあらゆる科學文明の最善の努力を傾注されて明治四十四年五月木曾は朝日將軍義仲の發祥地として世に知られたる宮の越驛附近に東西の兩工事を接觸させて茲に全く貫通の盛事を見たのである。

元來中央線といふ名稱は中仙道といふ古道のそれによつたものであることは勿論であつて、其目的方向も恰ど同様であるとはいふもの、中央東線に於ては全く似てもつかない別物であつて、武州大宮より上州高崎を通ずる中仙道は今日の所謂東北本線、高崎線及び信越本線の一部であつて、東京上野驛より九十三哩西北の輕井澤附近の追分迄が大體に於て國道中仙道と一致するのである。國道は追分

から西へ入つて昔の三大峠に數えられた和田峠を越えて諏訪湖を左に見ながら鹽尻の宿に達するのであるから中央線といふもの、その東半分は全く中仙道とは縁も由緒もないものであつて、眞の中仙道を相續すべき中央線は鹽尻以西、木曾谷を通過して東濃中津町に出づる中央西線を擧げなければならぬのである、更に詳しく言へば中央東線は東京新宿驛に發する舊甲州街道の押賀入りであつて、西線は文武天皇の大寶二年以來、彌次郎兵衛喜太八の膝栗毛を経て正系の中仙道の愛娘であるのである。

中央東線に於ける遊覽地としては、甲州では猿橋甲府、信州へ入つてからは富士見諏訪ぐらひのもので、飯田町から大凡十一時間、

汽車賃金三等一圓九十二錢、二等二圓八十八錢である。猿橋は飯田町から下りに乗れば隧道の出口にあつて瞬秒の間、右手の窓に眺むることが出来るのみであるが、もとより數十丈の斷崖に一條の奇橋を通ずるのみであるからして就いて見物するにしても一列車間で事足りる、甲府は東京より七時間の旅程、甲斐一國の中心都市として相當に榮えては居るものゝ、もとより有り觸れたる山中の一都會たるに過ぎないが、驛の附近武田氏の城趾は廢壘今尙當時の面影を留めて行人をして哀愁を催ふせしむるに足るものがある。

富士見は中央線に於ける信州の支關であつて、驛としては單に海拔三千三百尺の標柱を誇るのみであるが、此附近の高原的氣分の特

殊なるものあることは忘れる譯にはゆかない。元來信州其ものが全體として一つの大きな高原であることは勿論であるが、特に明るい透明な空の光と爽涼な大氣とを感觸させられる事に於ては鐵道沿線として富士見の右に出づるものは餘り澤山はないやうに思はれる。かうした氣分の味はれる場所は、信州では他に下高井の上林温泉と南安曇の上高地温泉とがあることは定論のあるところであるが孰れも鐵道からは極めて不便な場所にあるのである、此の他に章を別にして述べやうとする木曾谷の中には御嶽の山麓開田村と呼ぶ山中に方數里に亙る美しい高原があるのであるが是れ亦福島驛より五里の山中に位するを以て今日迄殆ど世に顧られなかつたのは頗る遺憾



とする所である。

諏訪は湖水と温泉と製絲業とを以て今日では殆ど全國遊覽地中の隨一として考へられて居るのであるが、此三つの特色は湖水を取巻いて上諏訪、下諏訪、岡谷三個所の夫々が所有する所のもので、製絲場が岡谷の特有であることは勿論、温泉は上諏訪、湖水の眺めは下諏訪に最も逸れた特色を見出すのである、然し何れにしても此三つの特色は併せて觀賞し得るもので廣い意味の諏訪といふ氣分では是非共一泊せねば素通りにはさせられない場所であらう。

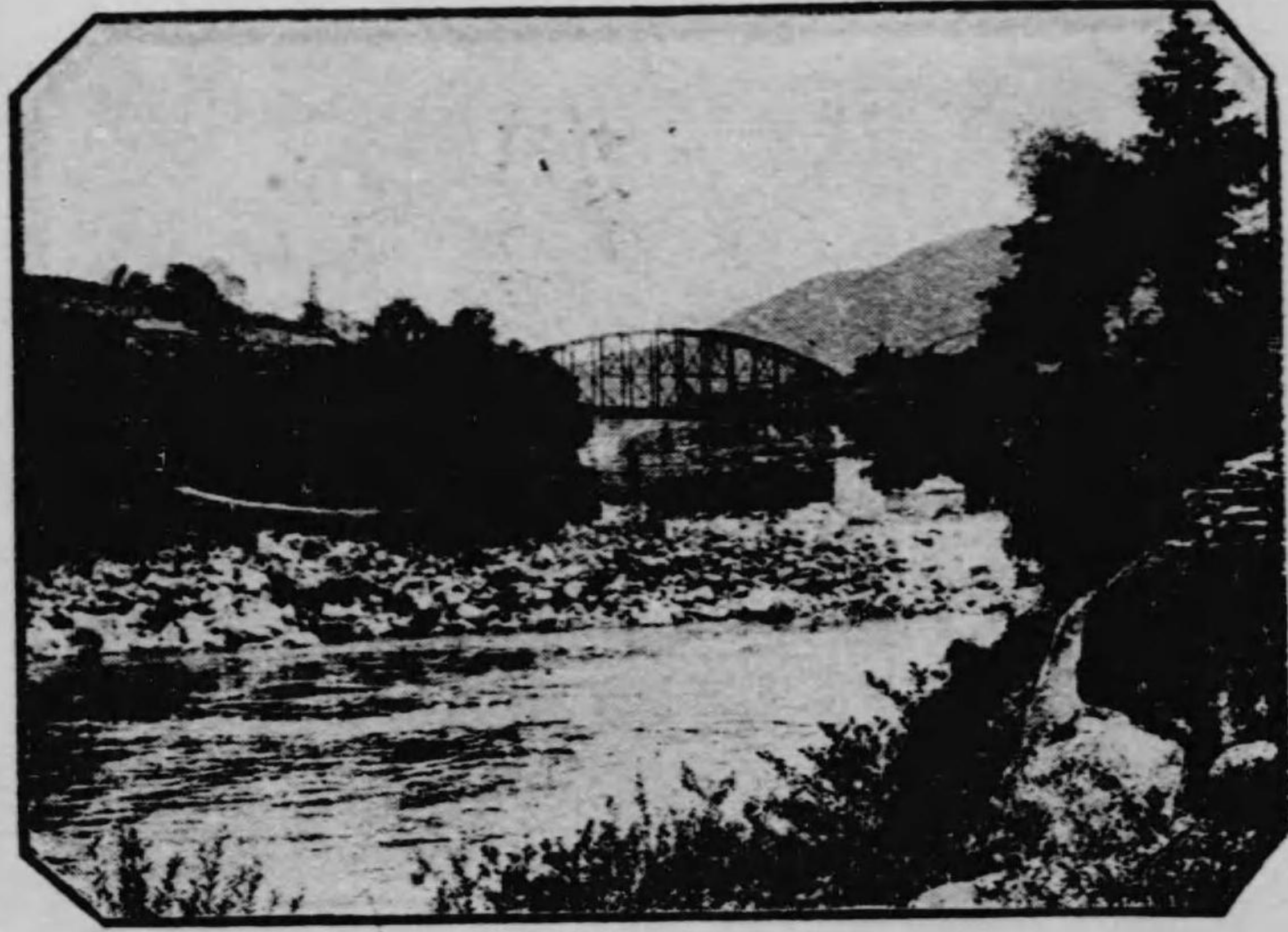
鹽尻で國道中仙道と一緒になつた中央線は、見渡す限り西北に擴がつた桑園の中を西南へ直走りに走つて忽ち洗馬驛を過ぎ櫻澤の峻

險を越えて愈々木曾——行政區轄からいへば西筑摩郡の地籍へ入るのであるが、鹽尻から此邊迄は所謂松本平の一角であつて、殊に鹽尻から北數方里の地は桔梗ヶ原と稱えられて武田小笠原兩氏の古戰場として著名なところ、今は大部分桑園に拓かれ所々に人家さへも建てられて昔を偲ぶすがもなき迄に移り變つて居るのである。この桑原を前卓として松本平の平野は西北に五里、北に十數里を展開して所謂舊六萬石の沃野を抱容して居る、其の西方一帶白雪を頂いて天空を摩するが如くに屏立せるものは是れ即ち日本アルプスの連山であつて峰々、嶺々、高く峙ち遠く聳ゆる態は眞に天下の偉觀たるを失はないのである。

鹽尻驛は斯くして中央東西線の繋がる所であると共に亦信越本線と中央線とを結ぶ所謂篠の井線の起點である。附近産するものに豊魔なる葡萄があつて八九月の交旅情を慰むること頗る大、近年甲州産のそれと併べ稱せられて同地重要物産の一となるに至つたのである。

櫻澤から以西は即ち木曾の地であつて列車の進むに連れて山は迫り谷は縮められて、眞に山に入りたる感じがする。地理學上の東西日本の分水嶺たる鳥居峠まで地籍にしては檜川村と呼ぶ一村に過ぎざれど贄川奈良井の兩驛を越えて六里に餘る急坂を奈良井川の清流に沿つて上つて行く、昔ならば女子供の足にては容易に越えられさ

うにもないこの險難も開け行く世の恵みにて、五千何百呎かの地下道を苦も無く抜けて西日本は眞先に藪原の宿に達するのである。贄川驛と奈良井驛との中間には平澤と呼ぶ宿驛があつて奈良井と共に漆塗と櫛とを以て特産物として居る、漆器は主に宗和膳の名によつて地質の堅牢を以て世に知らるゝもの、櫛は支那行きの塗櫛に精巧な技術を示して護謨櫛全盛の今日尙ほ依然として特殊の地歩を占めて居るのは觀物である。



橋 鐵 川 曾 木

中  
央  
線  
下

藪原の古驛——宮の越舊蹟の數々——駒ヶ嶽登山順路——御嶽登山案内——發展  
すべき上松——須原野尻三留野——東海道線と中央線と

鳥居峠とりあたうげから西南は國境美濃の坂下迄は四十分の一の急勾配を以て直下りに下つて行く、峠の墜道の出口が海拔三千百呎フビートで坂下驛が千呎フビートであるから藪原、宮の越、福島、上松、須原、野尻、三留野、坂下間三十六哩マイルの間に二千呎フビートの高低がある譯で、鳥居峠の登り坂に時間を喰つた列車はこの間に恢復すべく盲滅法に疾走する、其間絶えず右窓に近く木曾川の激流を瞰下し翠巒重疊、悠忽として現はれ悠忽として消ゆる景趣は到底筆舌の盡すところではないのである。

遊覽地としての福島、藪原等は章を別にして述べる機會もあらうが先づ便宜の上から一通り順序によつて一瞥して見やう。

藪原驛は古來「やどはらし」と呼ばれたる木曾山道中福島上松に次ぐ宿驛であつて、廣重や北齋などの古畫に見らるゝ傾斜の寛かな大様にして悠長な家竝みは此驛に最も多く其面影を見出すことが出来るのである、伊達には挿さぬと謠はれる黄楊の横櫛は此地方の特産物であつて、奈良井に於ける塗櫛とは全くその系統を異にし遠く元祿時代に此谷の南妻籠の郷よりお六と呼ぶ女によつて輸入されたと傳えられて居る、所謂お六櫛これにして本來は梳櫛のみを産したりしものが何時の頃よりか今日の横櫛をも交へ造るに至つたのである。此邊土地高燥にして避暑の好適地として數えられ殊に驛の附近小山の中腹に位する見晴鑛泉は一日の清遊に俗塵を流すべく申分の

ない所である。藪原から西北一里の地に昔から「からつぼ」と呼ばれた蟲厭勝の醫者がある。今は傳家の秘法として功能神の如しと稱せられ遠く山梨岐阜等の他府縣からさへも尋ねて來るので、三四月農閑の頃には列車の此驛に著く毎に幾十となき乳呑兒を連れ來た群がブラットフォームを賑はかすのも一種の奇觀である。藪原、宮の越間には今は墜道になつて居る山吹山を始めとして巴が淵、南宮神社、幡揚八幡、義仲舊里の碑、德音寺など義仲に關する古蹟が線路の兩側に近く點在する、山吹山は巴と共に義仲の愛妾たりし山吹姫に因むたものであるがそれかあらぬか山は一面に山吹を以て包まれ春の花に秋の紅葉に木曾名勝の隨一として數えられ

る、南宮神社、八幡神社何れも義仲心願の守護神としてその鬱蒼たる老樹に自らなる威靈を止めて思はず襟を正さしめるものがあ  
る、德音寺は義仲の菩提寺として數多義仲に關する寶物を存して居  
る、此所に安置せらるゝ義仲の守本尊と呼ぶる、觀音像は、義仲の  
墳墓と共に福島町なる興禪寺にもあつて、共に其由緒を誇り合ふの  
であるが孰れが正しくて孰れが正しからざるかは茲には議論の限り  
ではない、それよりも今の木曾人にとつて必要なことは、祖先崇拜  
の精神である、祖先を崇拜して自ら重じ自ら發奮するの自覺であ  
る。

宮の越を發して福島町に向ふ途中左の窓に近く一帯の峻峰半雲を

摩して聳え立つを指顧の間に望む、これ即ち駒ヶ嶽三十六峰の連山  
であつて古來その峻嶮なると眺望の雄大なるを以て知られ、近年  
又高山植物研究者の無二の寶庫として學界の注目を惹くに至つたの  
である、主峰の中の重なるものは何れも八千尺乃至九千尺の高峰に  
して奇巖峭壁山中の山として北方日本アルプスの白馬岳と併稱せら  
れて居るが登山の困難なる爲め餘りに世に知られなかつたのである  
が近來山岳研究熱の流行に連れ年々と登山者の數を加えつゝある、  
順路は宮の越よりするものもあれど普通は福島町の南上松驛に下車  
して此所より脚絆足鞋の甲斐くしき扮装となるのである。即ち上  
松驛より二十二町東すれば所謂駒ヶ嶽一合目なる里宮に達す、更

に十八町にして二合目となり滑川の支流を渡り敬神瀧の飛瀑に身を  
浄め、五丁にして三合目に至る、更に三十三町岩を攀ぢて六合目に  
至る、此附近五合目に金剛水あり九合目に至る迄水なきを以て多く  
此所に休みて行厨を開く、六合目よりは道も険しく奇岩怪石磊々と  
して横はり更に八合目に至れば一面の偃松青疊を敷けるが如く幾多  
の高山植物其間に點在して眞に植物園に入れるが如き感じがす  
る、九合目玉窪の小屋より八丁にして頂上奥社に達す、奥社は保  
食大神を祀る所、その眺望の雄大無邊なること獨り山を知るもの  
みの味ひ知り得べき境地である。

福島町は避暑地の章に於て委しく述べることにしやう、たゞ此所

からが御嶽登山の順路であることは忘れてはならぬ。山の事も後に  
章を改めて述べる意であるから茲には便宜の爲め大體の道筋だけを  
記して見やう。

御嶽登山の道は幾筋もあるが東京や長野方面からの旅客は木曾福  
島驛、名古屋方面からの旅客は上松驛で下車するのが普通の登山路  
であらう。福島から行くと、同町字清水町を通つて行人橋を渡り中  
畑を経て兒野と云ふ所に達する。それより「オエド」に至れば路は更  
に二つに岐れる。右は黒澤口左は王瀧口である。上松驛で下車した  
登山者は、棧にて橋を渡り、三尾の日蔭を経て常盤橋の傍へ出る  
ものと、又上松から西方小川の渡船を越して、瀬戸川御料地の林道

を通りて王瀧口の上島に出るものがある。

「オエド」から矢久保峠を越えて中澤に出る。路は溪流に沿ひ、老樹の間を縫ふ。やがて合渡峠に登れば、御嶽山遙拜所があつて、巍然として天漢に接する御嶽の雄大な山容を、正面に仰視することが出来る。此の峠を下れば、其の麓は即ち三岳村字黒澤で、戸數約百戸、村役場並に郵便局ありて電信事務も取扱ふ。福島町から此處まで道程二里半、御嶽神社の本社と若宮とがある。旅舎も數戸あつて登山者の爲に萬事の便利を計る。此處で強力を雇つたり、金剛杖や草鞋などを買入れたりする。黒澤から一里半。松尾に達すれば此處に松尾の瀧があつて、傍に摩利支天を祀つてある。これから先は

茫々たる草山で、左方に白雲の去來する絶頂を仰ぎながら、懺悔々々六根清淨の聲と、清く勇ましき鈴の音と、前後に相和し、風に濤立つ草原を白衣の道者魚貫して登る處、一種の奇觀を呈す。千本松の原と云ふのが此處である。五合目を過ぐれば、道は晝猶暗き喬木帯に入る。樅、桐等の針葉樹鬱蒼として枝を交へ、熊笹は狼籍として地面を埋め、僅かに山背に沿ひて一小徑を通ずるに過ぎぬ。所謂白河少將の仰ぎの森で、六合目の中小屋は此の森林の終る處にある。四合目から此處まで約二里。これより道は益々峻しく、七合目を過ぎて八合目に至れば、層岩磊々、山骨全く露出す。九合目に覺明社及び覺明コモリ堂がある。これに續いで豊明社、伊波羅社、白



川社などを右に見てこゝに黒澤口の奥社のある所劍ヶ峯に達す。其傍に御嶽山郵便局ありて登山者に便を興ふ。且つ又附近の小屋にて繪はがき、山圖等をひさぎ居り客の求に應じて記念スタンプを押捺す。黒澤から此處まで六里餘。

「オエド」で黒澤道と分岐したる王瀧口登山道は、左に入りて河合峠を越え、王瀧川を左に見、三尾の日向を過ぎて常盤橋を渡る、それより澤渡を過ぎ八幡瀧を見て、澤渡峠に登る。頂上に例の御嶽遙拜所がある。崩越と云ふ所から道は又二つに分れ、右すれば鞍馬橋を渡り淀地を経て上島に達し、左すれば王瀧川に沿うて廻り、大岩橋を渡りて矢張り上島に達するのであるが、鞍馬橋の勝地がある

から右を通るものが多い。鞍馬橋は兩岸の斷崖溪流を夾みて聳ちたる處に架し、橋下百尺、奔湍渦きて、木曾山中第一の奇橋と云はれて居る、上島は王瀧村の一部落で戸數約百戸、三岳村の黒澤に於けるが如く王瀧の登山口である同じく村役場並に郵便電信局あり。御嶽講社は各々其の講祖の登山せし跡を踏んで登るのであるから、或は黒澤口より、或は王瀧口より、講によつて登山下山共慣例が出来て居る併し普通の登山者には王瀧口の方が黒澤口より南方に位して居る丈、雪の消えることも早いし、比較的勾配も緩やかであるから、登りに王瀧口へ廻る人が大分多いやうである。福島から上島までの道程四里半、半島部落を出で、登山の道に就き、約八丁程行つ

た處に、既記の御嶽神社の里社がある。此の地小字を岩戸と云つて、巉巖崔嵬、神殿は岩窟に構へ、清水自ら湧出し、老樹繁茂、社殿壯麗、頗る風致に富む。此處より御嶽講祖本社の前を通つて一心堂を過ぎ、一合目の胡桃澤に至れば遙拜の大華表あり、十八丁を経て二合目大又となる。此の處三百餘段の石階を登りつくせば、御嶽の三社を祀れる處へ出る。それから裏見瀧、清瀧の勝を探つて、十二社権現、弘法大師を右に見、三合目を過ぎ、八海山に到れば八海山神社あり、國狭槌尊を齋る。此處より四丁を経て遙拜の石華表をくればやがて鬱蒼たる森林に入る。黒澤口の仰ぎの森に相對するもので、四合目五合目は此の森林中にある。左方の山頂は御嶽の

寄生火山たる三笠山で、山頂には三笠山神社あり、豊斟淳尊を齋る。森林を抜けた處を、六合目の田の原と稱し、矮樹點綴、荒寥たる窪地で天然の大公園と稱せらる。上島から此處まで三里餘。三笠山は田の原より高きこと僅に七十米突一小丘の觀があるが、これでは海拔二千二百五十五・四米突の高山である。田の原よりは山勢頓に急峻、五葉松の横匍する間を喘ぎながら登る。磊々たる岩石頭上を壓して今にも崩れむとし、天風横さまに吹いて笠も塵も撈り奪られる程である。七合目には大江大神あり。維新前は婦人は此處より上に登ることを許されなかつた。八合目を金剛堂と云つて、此處には數多の神祠がある。八合目を過ぐれば中央不動の銅像がある。

これより五丁にして王瀧口の頂上に達する。此處が既記の王瀧口御嶽神社の奥社である。上島から五里。こゝより西方八丁を隔て、奥の院がある日の御門月の御門などがあつて山内の一名所である。王瀧口の奥社から登ること八丁にして黒澤口の登山道と合する。此の間を『八丁たるみ』と云ふ。更に石階を登ること數十段にして最高峰の剣ヶ峯に達する。黒澤口御嶽神社の奥社は此處に祀られてあるのである。

福島驛の西南一里、棧の奇勝を右窓に眺めて上松驛に至る。上松は此谷中福島に次ぐ都會であつて、御料森林鐵道の起點として將來尙ほ發展すべき約束を有つて居るもののやうに新しい家並が年毎

に殖えて行く。

上松須原間の寢覺の床小野の瀧は先の棧、德音寺、駒ヶ嶽、御嶽と共に此附近の風越山と奥川の月とを併せて夫々木曾八景の一つに數へられて居る、寢覺は上松の南十數町臨川寺境内にあつて汽車の窓からは右方面に瞰下される、小野の瀧は更に南十數丁、翠屏の中より列車の窓に水泡の打ちかゝるばかりに左手近く淙々の響を擧げて旅客の眠を覺ます。

上松から西南七哩、途中倉本と呼ぶる、信號所を素通りにして花漬の名所須原驛に達す、須原の南十町伊那川の谷に木曾興業會社と呼ぶ製紙會社がある、多く新聞紙を作り産する所年額七十萬圓、

木曾の有する唯一の工場である。

須原野尻兩驛の中間長野と呼ぶ部落より西北一里半の山中に鹿の湯と呼ぶ鑛泉がある、泉質ラヂウムを含む事に於て天下稀に見る程のものなりと分析の結果は發表されて居る。

野尻驛の南三留野は伊那郡飯田町に通ずる大平街道の起點として繁榮して居る、此邊木曾川の景色は漸く雄大を加へ奇勝絶景到處に大自然の技巧を展べて居る。

三留野の西南十數町木曾川鐵橋を渡れば列車は賤母の美林を左に見つ、疾走して隧道を越え忽ちにして美濃の國坂下町に達す。贊川より坂下迄三時間鐵路五十哩、驛次十、中央線の自然の美は集め

て悉く此の中に在りといふも憚らないのである。

坂下より名古屋迄は五十哩四時間を以て達する、通じて鹽尻迄百八哩八時間、更に東線を通じて二百五十哩十九時間を要するのである、これを東海道線東京名古屋間二百三十哩急行して七時間を出でざるに比すれば、其所に霄壤の差あるを認めないわけにはゆかないのであるが、中央線には又中央線の有する特殊な使命が存するのである。山と海、それは何れも兄たり難く弟たり難き景趣を有つて居るのであるから、旅客は一度この中央線によつて、東海道線に味はれぬ特殊な趣味を感得するも強ち無益のことではあるまいと考へられる。



福島町の景

避暑地上

團扇は無用の圓物——福島町役場の避暑客案内——避暑地としての避暑地——此谷の美しさを書き記したる如何なる讚辭も割引して考ふるを要せず

若し天道に私なしといふ謔が真であるならば、この木曾谷の夏こそは、實に木曾人が雪と寒氣との慘澹たる長き冬の隱忍に對する最も公平なる天の應酬であることは言ふまでもない。

眞夏の盛り、白い雲が遠い平野の末に湧いて、朝から油汗がじりじりと滲み出すやうな幾日かを、木曾の谷ではまだ春の心地で鶯の聲を聞いて居ると、明放した窓からは涼しい風がしつかりなしに青葉の薫りを乗せて見舞つてくる。團扇も煽風器もこの谷では無用の圓物、白地を着る間も極めて僅かで、それもほんの日中の間だけのこと、谷一面の青葉に置く露の繁きためか、朝夕は裕羽織の一枚も用意せざれば恥をかかぬかの仲乗さんの木曾節にも謔はれたる通

りである。

この谷の何處が避暑地として最も適當して居るかは後に述べることとして、先づ便宜の爲め近年福島町役場の調査になる案内書なるものを抄録して避暑客のために小さな表を作ることにする。

一盛夏日中温度八十五度を越ゆるは稀にして朝夕は七十度内外なり。

一夏期中蚊帳の必要なし。

一旅館は岩屋、鳶屋、益田屋、俵屋等を初め大小數十個、外に下宿もあり、避暑客のために客室を備えあるもの亦數十戸、その他別荘向き貸家數多あり。

一鮮魚、果物、蔬菜充分にして牛乳は朝夕二回配達し外に新鮮なる川魚多し。

一宿料は六十錢以上二圓位迄あれど普通上等一圓内外なり、下宿は九圓より二十圓位迄。

一電燈電話の設備完全にして長距離電話は東京其他に通ず。

一汽車東京新宿より十二時間二等三圓四十錢三等二圓二十錢、名古屋長野より各六時間、二等一圓九十錢、三等一圓二十錢、最近十年間夏期傳染病患者を發生したることなく、水質極めて良好にして水量豊富なり。

一近郊散步地多く尙汽車によりて無數の木曾谷の絶景を探勝し

得べし。

この效能書にはまづ嘘はないやうである、たゞ蚊は近年幾分は出るやうになつて來たのは秘し切れない事實で土地のものはそれを中央線開通のお影だと斷定してゐる、然し町は谷の急斜面に積上げるやうにして作り上げられ泥水や汚水は急勾配な溝を流れて木曾川の急流によつて運び去られるのであるから、溝や水溜りが急に此頃になつて蚊の發生所とならうとは思はれない、何れにしても宿を旅館に求めるものゝ外は、一張りの用意をして來た方があとで苦情の無いのは確である。

日用品には少しも不自由はないが食物としては鮮魚果物は餘りに

誇るに足るものはないが然しこの神仙境に入つて食物の贅澤を盡さうといふのは抑もの心得違ひである、神様の使人となつたり御嶽様の行者になるには少くとも三週間や四週間は飲まず食はずで潔齋しなくてはならぬ法則がある位だから、斯やうな人間界を離れた神仙境に於て食物の贅を求めんとするのは先第一にその精神から改めてかゝらねばならない、避暑地で食物の贅を盡したり社交の粹を競べやうとならば箱根だの輕井澤だのと他に幾らもその場所はあるのである、それらは最早暑さの爲めの避暑ではなくて、避暑のための避暑である、それらは全く成金黨や高官連の馬鹿さ加減を試験すべく作られた虚榮の巢である、ヴァニチー フエヤー である。苟くも



清廉潔直を以つて自ら持せんとするの士の久ふすべからざるところである、三ヶ月の長い期間を幾分なり人生の爲めに有意義に用ゐんとする志あるもの、耐えうべからざるところである。

が然し兎も角も谷を全通して中央線が開いたのであるから假令不出來ながらも西洋料理の眞似位は出來、汚ないながらも撞球の設備位は整つて居る、旅館も烈い山の中と聞いて來た初めての客を驚かすに足る位の立派なもののは出來て居る、近時福島町の具眼者が野菜市場を計劃して居ることであるが、これが出來れば一番なくてならない新鮮な果物が食べられる、それまでは暫く辛棒しなければならぬもの、それとて今の果物や野菜が全然古かつたり腐

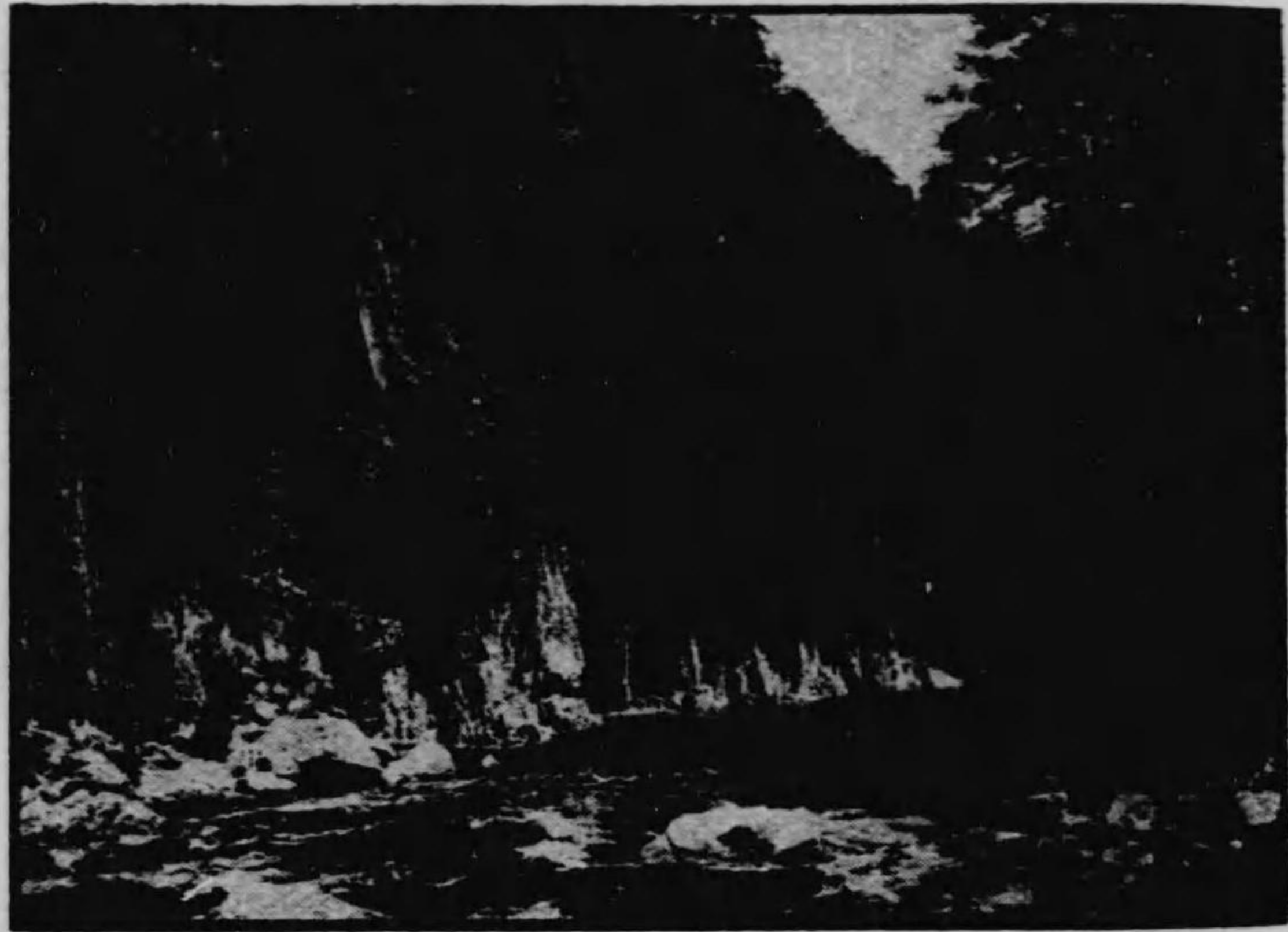
つたりして食はれないといふ程度のもものでは決してない、海の魚に幾分の敗けはあつてもその代り川魚にかけては決して恥かしからぬ得物がある、夏のころでは鱈と鰻、就中鰻の味は木曾の誇りとすべきものであつて木曾川の水の流れが急で瀬が荒いだけそれだけ肉は緊まつて香氣が高く、到底泥水の中に大きくなつた泥鰌や鯉などと同日に談ずべきものではない。

交通の便否は言ふも愚か、東海道の豫備線として、第二の東海道本線として、重大な意義を以つて造られた飯田町名古屋間のこの線路に如何に財政困難の日本政府でも幾らかでも金を惜しんでこしらへた筈はあるべくもない、されば天下の險難と稱せられた棧も今

は懸崖百丈の岩壁を葡ひ虹のやうに山から山へ架け渡された天空の橋によつて何等の愴悞もなく又何等の故障もなしに朝夕上り下り各七回の列車を運轉して數千の客を送迎して居るのである、飯田町發名古屋直通の外には長野行きに乗つて鹽尻驛にて乗換ふる便もあり、十二時間といへば長いやうではあるが夜行を利用して暑さと混雑とを避けるのも得策であらう、長野名古屋の何れよりするも各六時間京阪地方からも十二三時間で達せられる手近かの所に斯のやうな自然の避暑地が、未だ俗悪なる社會の爲めに少しも損はるゝことなしに遺されて居たといふことはまことに感謝すべきことではあるまいか。

旅客はこの谷に暑を避けるために旅立つ以前に於て、著者が他の幾多の場合に於てこの谷の美しく偉大なる自然に就て、又その土地人情風俗などについて述べたところの凡べての敘述を、幾分なり割引して考へることを必要とされないといふことを第一に信じて貰ひたい、何となればこの谷の、たつた一つの山、たつた一つの谷、一つの木、一つの谿水に就いていさへも、如何なる詩人も、又如何なる美術家も、到底その幾分の一なりとも寫し出すことは不可能であるから。

御嶽山へは福島町から一番の順路で往復十八里、駒ヶ嶽へは往復九里、山が飽きれば水に泳ぐべく、木曾川には到るところに天然



鞍馬の景

避暑地下

の美事な游泳場が出来て居る。勝景散策としては、棧、寢覺の奇勝を始めとして幾多の騷人墨客の血を湧かさせた景勝や、旭將軍義仲を中心とした正史傳説上の古蹟がこの町をとりまいて二里、三里の圓の内に點在する、が先づ左に二三の避暑地についてそれぐその特色を述べて見やう。

本多博士の木曾風光論 — 世界一の避暑遊覽地 — 中心地としての福島町 — 理想的避暑地としての大原 — エドモンドグローに勝る鞍馬 — 行李の解き場所

本多林學博士は先年長野縣が、木曾谷の風光調査を企てたるとき、囑をうけて遍ねく此谷を跋涉して實地に調査をした結果、避暑地遊覽地としての木曾を、要するに木曾は谷全體が自然の大きな樂園であるけれども、その本谷所謂木曾路南北二十四里に亙る沿道に就いては殆どその天然の風景は破壊し盡されて居る、と論じて、ルソーの、自然の手に成れるものは總て美なり、人の手を経て腐敗す、といへる言葉は眞にこの谷に於て遺憾なく發見せらる、と言つて居る。

實に自然といふ巨匠の手になれる藝術は、それを形成するところの個々の事物そのものが完全せる藝術である點に於て時間より超越す

るが故に、如何なる偉人の努力をも足許にも寄付かせぬ永劫性を持つて居るのである、これに對して吾等が常に崇高の念を感ぜしめられ、これに向つて我等が常に憧憬の心持を起さしめられるのは、その永久性を有するが爲に外ならないのである。

斯のやうな威力を持つた自然といふものは獨り木曾谷に於てばかりではなく、いづれもみな急激なる物質文明の爲めに惜氣も無く破壊し盡されて仕舞つたのである、そしてそれが今になつて如何にもその輕はづみであつた事が悔ひられ、到る處に保護とか恢復とかいふ聲が識者の間に喧ましく叫び出されるやうになつたのである、木曾谷なども近來になつて俄に風致林だの何だのと騒ぎ始めて、殘存

せるものゝ保護や破壊されたものゝ恢復などに力を向けられるやうになつたのであるが、如何なる科學の力を以てしても殆ど手の附けられやうのないのに苦しんでゐる。

が然し元來が百何方里といふ廣大な山林溪谷のことであるから、かやうに破壊されたといふものゝ、それは全體から見れば蟲の喰つた位のもので、神代の頃から全く斧鉞を加えられずに延びては枯れ延びては枯れた天然の大森林が到る處に擴がつてゐる。殊更中仙道の沿道から肋骨のやうに左右に開いて幾つかの溪谷を逆ると、そこに無数の神仙境が、少しも損はるゝことなしに残つてゐる。かうした場所は無論青葉と水とに豊富であつて、盛夏の暑をやるため

には屈強の場所であることは勿論であるが、避暑地として一週間なり二週間なり滞在する爲めには、それと同時に衣食住の便宜といふことがより重大な半面であることは言ふ迄もない。この必要からして幾分は自然の美景を損はれて居るにしても、避暑地としては矢張り鐵道の便宜によつた、小さいながらも都市の形を具えた場所が選ばれなければならぬことになる、そこで木曾谷に於ては先づ福島町を第一として次には藪原、上松などを中心とした清涼の地を求めねばならない。

種々の意味から言つてこの谷の中心たる福島町は、避暑地としての要素を最も多分に備えてゐる、それは常に都會地として衣食住の

便宜が與えられるとか、木曾谷政治の中心として種々の研究調査に都合がよいとか或ひはまた電話局の所在地として通信上の利便があるとかいふのみではなくて、山と川とのたゞすまひ——それはこの谷の何處にも見られることながら、とりわけその配合に垢抜けのしたところがあり、搗て、加へて青葉の間に展開された市街家屋の趣きが言ふに言はれない調和を持つて、少くとも人に快感を起させるには充分である、殊更市街の直ぐ西北に聳えてゐる城山御料林は木曾稀れに見る程の幽邃な美林であつて、その包含する樹木の種類は數百種に亘り、殆ど木曾の植物園たるの觀があつて、黒いまでに老繁つた檜林を背景として種々の濶葉樹が、みなそれ／＼の形それ

く、の緑に繁り合つて白堊の街を包んでゐる有様は日本に於ては餘りに比類を見ない景色である、そしてこれらの街の真中を底深く流れてゐる木曾河は銀河のやうに青葉の間を纏接して更にこの景色に一段の詩味を添えてゐる。

此町を中心として約一里の東南方に方つて一つの大きな高原が駒ヶ嶽の麓まで展開してゐる、この高原は大原と呼ばれて太古駒ヶ嶽連嶽の崩壊して土砂を流出した土地と伝えられて居るのであるが、海拔三千五百尺、面積三百餘町歩に互つて、一面に花崗石の分解よりなつた美しい土砂の上に綺麗に刈られたやうな芝草を布いて、その間を清冽玉のやうな水が幾條となく奔驅してゐる、その水の清淨

で豊富なこと、芝草の美しく心持のよいこと、は遙かに輕井澤や富士見などの及ぶところではなくて、殊に處々に小山のやうに轉んでゐる巨きな巖の根本には、それをとりにまいて、矮生の松や白樺などが態よく密生して自然の植込が作られてゐる、その間々に河原柳と河原菜萁とが躑躅を根柢として、此原一面に何千百となく群團をなしてゐる、かうした美しい庭園が横に一里縦に一里半も擴がつてその周圍はいづれも滴たるやうな緑の山に包まれて居るのであるが、それが輕井澤に於けるが如くに陰鬱でなくて、朝に晝に雨に晴れに、常に爽涼の空氣にとりまかれてゐるのは殊更に嬉しいのである、目下のところ避暑地としての大原は全く顧みられないのである

が、適當に開發された曉には全國の模範避暑地となりうべしと本多博士も言つてゐる、然しそれは尙ほ遠い將來のことで今はまだ馬を主とし、鶯や時鳥を客人とした一面の草原、たゞ一日の清遊地としてのみ紹介するより外はないのである。

この二つに比べては避暑地としては缺くるところはあるもの、盛夏一日の觀光地としては遙かに卓越した景勝の地は數え切れな程に散在してゐる、就中福島より御嶽登山道に沿つた王瀧川數里の上流に位する鞍馬の景は實に本多博士をして世界の絶景エドモンド、グローに似て之れに勝るものと叫ばしめたる眞に天下の絶景であつて、王瀧川の水、潭を湛えて湖の如くなるところ、兩岸に屹

立せる數百尺の削壁によつて仰いで上天を見ざるもの數丁、その間幾條かの瀑布は素絹を懸けて華氈を擴げたやうな岩躑躅を飛沫に包み、青潭に舟を泛ぶれば香魚銀尖の如く綠樹の影を飛んで眞に所謂神仙境にあるの思ひを起さしめる、かの奇勝として昔から知られて來た棧や寢覺の如きいづれも天品の絶景ではあるがこれから見れば誠に平凡で結構が如何にも小細工であると言はざるを得ない。

これは一つには棧とか寢覺のやうな、古來の景勝は景勝そのもの、爲めに却つてその周圍が俗化されて田畑が出来たり家屋が造られたりするやうになつて仕舞つたこと、いま一つにはそれ等の所謂景勝なるものは孰れも岩とか木とか水とかいふ即ち奇岩怪石幽邃



深潭等の文字によつて表はさるべき性質のものであるに反してこの鞍馬は實に山あり水あり谷あり岩あり木あり瀧あり、青空あり白雲あり、あらゆる自然あらゆる造化の美を一つに集めて而かもその周圍は悉く鬱蒼たる天然の大森林であるが故にこの景色一つであらゆる自然界の妙趣が網羅し盡されて居るのであるこの點に於て眞に本多博士の言ふ如く日本一と稱して少しも憚るところなくかの山陽の靈筆によつて天下一の奇勝となつた耶馬溪の如きはこれに比べて遙かに小規模な殊にその水の少ない點に於ては全く足許にもよりつけぬ程の貧弱なものであると言はなければならぬのである。

斯様な景色は鞍馬を中心として王瀧川の上流下流に互つて幾つもの

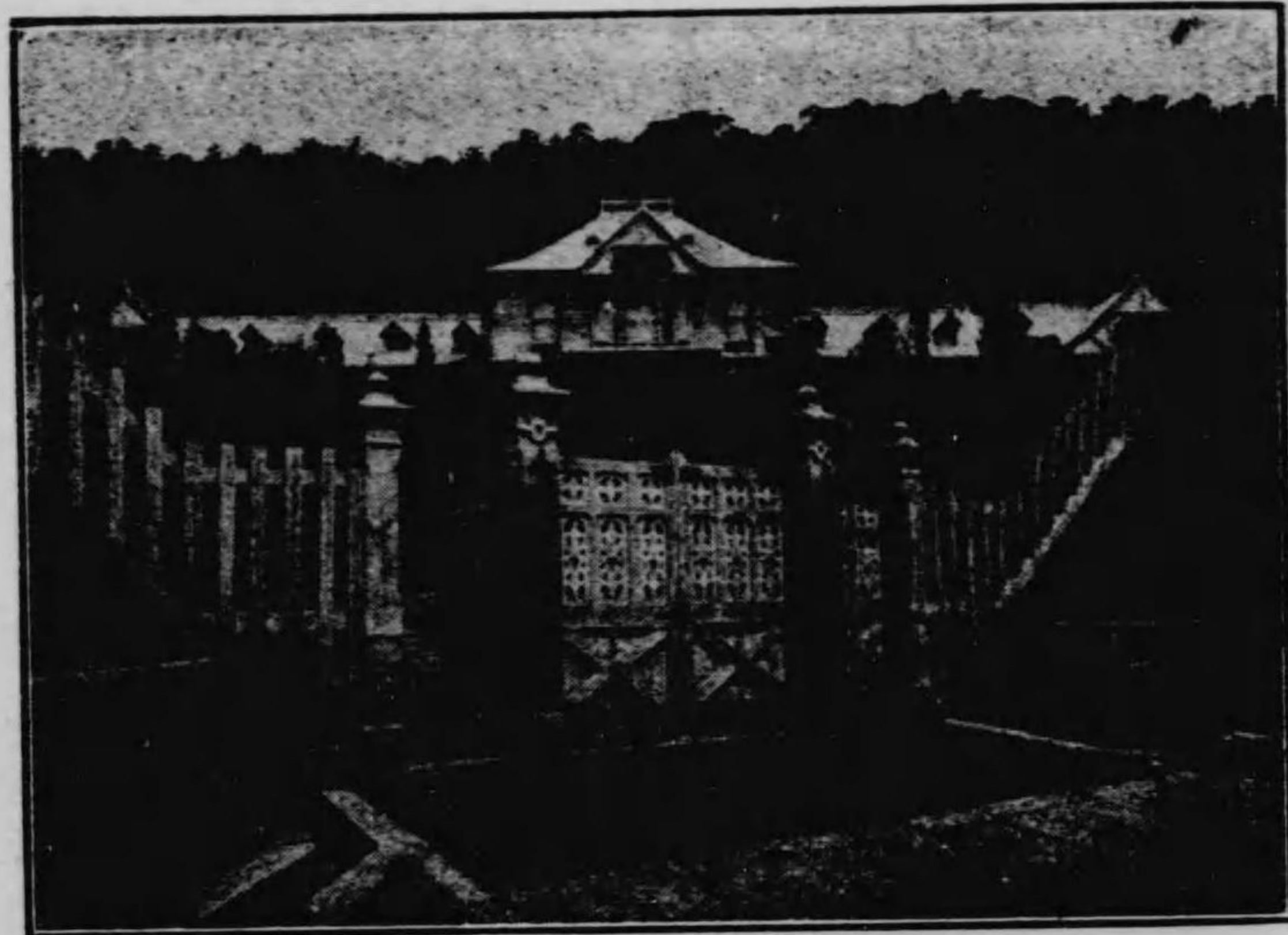
散在する、殊更上流の氷ヶ瀬柳ヶ瀬、下流の常盤橋は孰れも思切つた巨大な自然の截刀に成つたものであるが、幾日間なり滞在すべき避暑地としては先づ旅館に不便な點に於いて資格を缺いてゐるのを免れない。

木曾川の下流美濃との國境に至れば水量も著しく増加して、河を背景とした景色が壯大になつてくる、中に就きて國道一里餘りを包む賤母御料林は最も美しく最も幽邃なる原生林であつて林業家の垂涎措かざるところではあるが、而し避暑地としてよりもとより遊覽地として擧ぐべきものであることは言ふ迄も無い、此邊を中心として木曾の天國と言はれる山口村や兼好法師の遁世した湯舟澤や

廢滅した妻籠の古宿や山村良勝の古戦場の城山など孰れも一里二里の半圓のうちに遊覽すべき場所がある、若し天幕やその他のものを用意して眞に森林生活の静けさを知り、トロローの所謂『強くして損はれざる美しきもの』を見究めんとならば無論此御料林に若くものではないであらう。これと谷を挟んで對立する田立村の山々には幾流かの大きな瀧が竝んで夏を餘所なる別世界を作つて居る。殊更そのうち最も上流に位する天河の瀧は俗に百間瀧と呼ぶるところのものであつてその壯觀筆舌の及ぶところではない、これらの瀧を越えて更にその上流に上ると古木老樹鬱蒼としていづれも深山の趣を備えて居る中を潺湲して流るゝ銀線の如き幾條かの細流

があつて、その間を石によつて徒渉するの快さは實に想像を越えてゐる、このあたり中央線阪下驛を隔る僅に二里に過ぎざれど深山幽谷の風致を備えて眞に仙境にあるの感を起させられる。以上の外若し強いて避暑地を求めやうとならば藪原宿を擧ぐるより外はあるまい、藪原は鳥居峠の南麓にあつて、土地高燥、氣候爽涼地文學の上からは眞に絶好の避暑地であるが實際には山に包まれて風に乏しく、又附近に鬱蒼たる樹林を缺く點に於て共に福島に及ばざること遠しである。

これを要するに、木曾は谷全體が立派な避暑地であり遊覽地でありうるのである。旅客はたゞ廣漠たるこの谷の何處に迷よい何處に



局支曾木局理管野林室帝

日本一の  
檜林上

捨てられたりとして、その自然の殺風景なのに飽かせられたり又は盛夏の炎天に暑さのために苦しめられるやうな憂は無いのであるが、唯最も愉快な心持のよい夏を過ごす爲めには、先づ以つて福島町に行李を解いて、晴れた日を見定めては東へ一里西へ二里と出掛けるのが一番の得策であらう。

十五萬町歩の檜山——帝室林野管理局——木曾の歴史は檜山の歴史なり——王朝時代の木曾山——群雄に擔はれたる木曾山——尾州侯の化粧料——林業經營家としての市川甚左衛門

信濃といへば直ぐに山の國と合點されるのであるがその又奥の木曾の谷といへば殆ど人間の棲むべき場所ではないとまでに考へられてゐたところだけあつて東西二十三里南北七里面積百十四方里十五萬町歩といふ大きな木曾谷一圓西筑摩郡の地は到るところに山と谷とが重なり合ひ疊み合つてそのうちの十四萬町歩までは所謂木曾の五木と呼ばれて全國の小學校の兒童に迄名を知られた檜、榎、高野槇、羅漢柏、櫨の良材が晝も暗いばかりに茂り合つて居るのであるがその十四萬町歩の大森林のうちの十一萬町歩までが昔のまゝの檜林に日の光も洩らさない御料の山と聞いたならば木曾御料林と三歳の赤子まで口にするのも無理がないと首肯されるであらう。

此御料林は今は二十二の事業區に岐たれて年々歳々伐採され、それと同時に後から後からと植林されて永久に盡くることなき帝室の御財産として福島町の東北に聳え立つ立派な林野管理局木曾支局管轄の下に事も無く治められて居るけれども遠い昔は全くの自然に生えた天然林の其儘で猿も棲めば鹿も居る、何處から何處までが人間の領分でどこから何處までか獸の領分だやらお天道様の外には見分けもつけ兼ねたもの、況して何處迄がお上のもので何處からが人民のものかそんな區別は少しもなくして數千餘年を過して來たのである。然しその間にも山の木は常に營々として榮え谷の水は常に滾々として湧いてこの大きな自然を育んで居たのである。

自然のこの山や谷に恵みするところは斯くのごとく遠い昔から嘗て渝つたことなくまた嘗て遣れられたことがないのであるが、さて人間がこの大きな自然の山や谷に及ぼした方の力はどうかであつたらうか、この大きな自然の現状を述べる前に當つて少しくこの尨大な森林——御料林に就いてその不言の歴史を物語らう。蓋し御料林の歴史を語るは即ち木曾山の歴史を語るものであつて、木曾山の歴史を語るはやがて全木曾人の生活を物語ることになるのであるから。

木曾の歴史は景行天皇の四十年、皇子日本武尊が東夷征伐の砌に歸途神坂の山を越えられたといふことに發足して居る。越えて文武帝の大寶二年十二月に始めて岐蘇の山道が開かれて茲に始めて巨き

な自然や山猿ばかりを相手にして居た木曾人に人間並みの社會的生  
活の第一歩が開かれたのである、然しそれはたゞ木曾の上古史であ  
つて、この美しい大自然が木曾山若しくは木曾山林の名によつて天  
下に知り互られその自然の懷に育くまれた木曾人が人文史の上に  
自分の一頁を見出したのは、かの圓融帝の天元二年藤原信濃守の平  
蕈採收の事蹟に發端を開いてゐるのである。信濃守は名を藤原賴忠  
と云つた、嘗て信濃守に任ぜられて久しく此國に止まつたが任滿ち  
て京への歸るさ神坂の峠から人馬諸共に遙かの斷崖へ轉げ落された  
のであつたが幸に木の枝に支へられて命拾ひをしたのみならず谷  
一面に生えて居た平蕈を澤山に取り集めてそれを京へのお土産とし

た、かうした不思議の行きがかりから大きな木曾山の名が、地上に  
ひれ付いた小さな蕈によつて人文史の上に仲間入りをすることにな  
つたのは誠に奇觀といはなければならぬのであるが、而かもそれ  
が二千年後の今日になつて、多くもあらぬ民林の切り荒らされたそ  
の後へ副産物利用の道が餘儀なく考へ出された結果椎蕈の松茸のと  
今更のやうに騒ぎ立てなければならぬやうになつたのはこれ亦更  
に奇縁と言はざるを得ないのである。  
木材としての木曾の檜が歴史の上に現はれたのは天文九年の飢饉  
に木曾の義在が加賀や越中などの遠い國から澤山の柚や木挽を招い  
て盛に切出したといふのもつて嚆矢として居るやうであるが、信

濃風土記に檜、椴を以て木曾の産物なりと記してあるのを見れば餘程以前から盛に用ひられて居たことは明である。然し木曾の檜が特にその眞價を認められて海内唯一の獨歩の地位を占めるに至つたのは、かの天正の英雄織田信長にその功を歸せなければならぬ、信長はその當時亂世の英雄として一面軍陣の猛者であつたと同時に一面非常な敬神家であり勤王家であつた、彼は天正十年に命じて木曾山林から善良な檜材を切出させそれを以て莊嚴な伊勢大廟の神宮を造營させたのであつた、誠に畏れ多いことであるがそれ以來大廟の神材は必ず木曾の檜と決められて今日に至るまで日本一の良材の名を恣にして居るのである。

信長に次いで天下を掌握したものは豊臣秀吉であつた、彼も亦一世の偉傑であつて武將としてのその智略は矢張り同じ様に經世治平の上にも秀れた素質を持つてゐた、即ち彼は天下を治め群雄を靡かせるべく戦つて居る間に於ても、苟くもその敵手が所有して居る各地の富源に就いて常に特殊の注意力を向けることを忘れなかつた、そこで彼は先づ當時の木曾義昌が領有して居た木曾山林に眼を着けて直にこれを討ち平げて自分の領有として仕舞つたのである。そして彼は更にその領有した木曾山林の經營をば經理の道に通じた石河貞清に任じて、木曾川を利用して木曾氏のとつたと同じ方法によつて盛に良材を搬出すべきことを命じたのであつた。後年山村良侯が

徳川氏の命を受けて山林經營に手腕を振つたことは有名な事であるが、その山村良侯の運材法は矢張りこの石川氏の方法を踏襲したのに外ならないのであつた、而してこの方法は今日に於ても大した變化もなくして實行されて居るところを見ると當時の運材法の發案者たる木曾義昌の名智を嘆賞せずには居られないのである。

かくて後木曾の谷は鳥居峠から以南悉く尾州侯の藩領となつて毎年檜樽二十六萬八千八百八十挺、土居四千三百五十三駄、山村氏代官免白木五千駄宛の伐採を行ひ住民も亦恣まゝに切り出したので近い前山から次第に荒廢し始めて來たのであつた、そこで元祿二年に金松、栗、松、槻を制止木とするの制度が敷かれ、更に寶永五年に

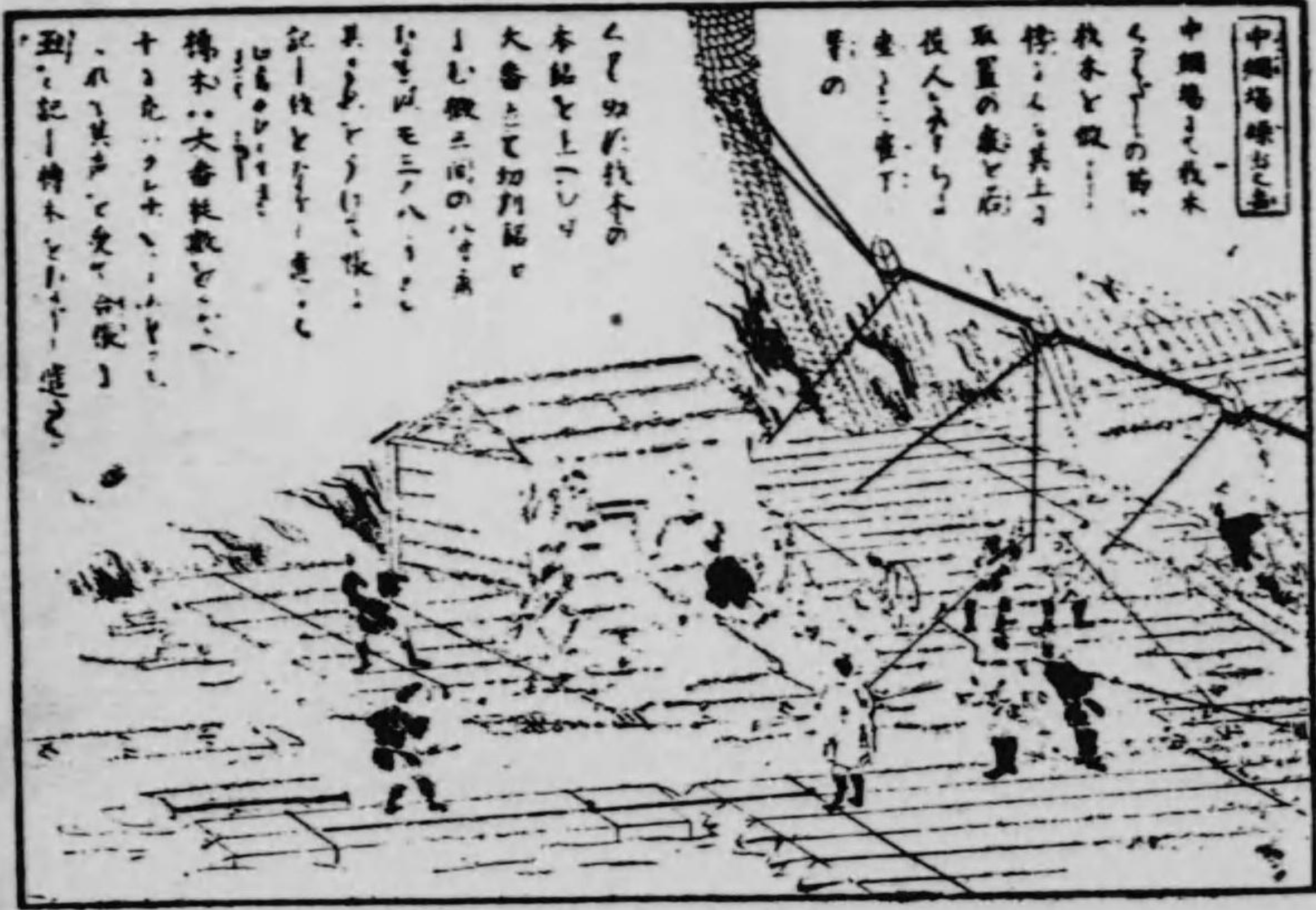
は、檜、樅、高野槇、羅漢檜を停木とし六年更に樺を加へた、これが即ち五木の起原である。此外に昔から巢山といふものがあつて伐木を停止されて居たのがあつた、それは王朝時代より鷹狩の習慣が生じ戰國時代に於ては非常に流行したので幕府は番人を置いて木曾山中の鷹の巢を調査し、その周圍二十町歩に互る伐採を制止して以て鷹の繁殖を計つたのである。がこれ等の制度は制度としては行はれたけれども多數の人民は巧に番人の眼を盗んで何時とはなしに濫伐を行つた爲め寶曆以後は屢々洪水を生じその被害も年と共に烈しくなつて來たので時の水奉行市川甚左衛門普請奉行大村源兵衛等が調査の結果その原因を木曾山林の荒廢に歸すべき旨を答申したため



遂に二人は其儘木曾に留まつて水源を涵養すべく山林改革の命令を受け、そこで二人は従前の御用山を留山として二十一箇所を定め、巢山を六十四箇所に増して嚴重に盗伐を禁じ更にその周圍に鞘山と言ふを設けて伐木を禁じた、されば當時の人民は、「情ないぞへ市川様は、巢山留山鞘かけた」と諺つてその困窮を訴へたといふことである。

蓋し市川甚左衛門は當時に於ける最も出色の林業経営家であつたことは認めなければならぬ、彼は留山巢山鞘山の制を設けると同時に従來の制度は單に伐木を取締るのみに止まつて居たのに反して更に一步を進めてもつと積極的にその植林保護に力を盡したので

あつた、無論今日よりこれを見れば特筆すべき程のことではないのであるが、當時無限の山林として只々大なる自然の成行きに任せて顧みなかつた時代に於て輪伐輪植の方法を案出してこの大自然に人間の手を加へやうとしたのは確に一隻眼を有するものと言ふべきであらう、かくして一方人民の困窮を救ふためにこれらの禁制以外の山林に於ては五木以外の樹木は任意に切出すことを許し同時にその價格の標準や板子の種類等を制定して後年出來た所謂三山管理規定及び犯伐處置法の不文の制度を實施したのである。



中興場とて我木  
 んてしこの節  
 我木とぬ  
 傍らんら其止る  
 取置の處と成  
 長人みすらし  
 せよとて下  
 早の  
 んてぬ我木の  
 本柱と上レレ  
 大番とて切刃  
 一しむ幾三回ハ  
 けを以モニアハ  
 其、あ、と多け  
 記、性、と、を、  
 知、る、の、  
 揚、和、ハ、大、番、柱、と、  
 十、三、九、ハ、ラ、レ、キ、  
 一、ハ、其、声、と、受、  
 五、一、記、一、特、木、と、  
 一、造、と、

木材大川狩の圖

日本一の  
 檜林下

玩具のやうな森林鐵道——無限の寶庫天然の大美林——伊勢神宮御用林——伐木  
川狩筏流し——官民の境界争ひ——二十四萬圓の恩賜金——記念林の造成

旅客は中央線の上松驛から西の方へ、木曾川にかけられた小さな鐵橋を渡つて玩具のやうな機關車が年百年中幾つかのトロツコをつけて可成の急勾配を小川の谷の奥の方へ上つて行くのを見受けるであらう。この小さな鐵道は即ち木曾御料林の森林鐵道であつて、今のところではまだ上松から小川の事業區まで僅かに六七哩を運轉して居るに過ぎないけれども、行々は晝尙ほ暗き木曾谷の山中到るところに縦横に敷かれて懸てはこの大きな自然を全く征服する時期が到來すべく豫期されて居るのである。小川の事業區といへば前に述べた御料林のうち的一部分で上松から西方小川の谿谷を挟んで數方里に亙つた鬱蒼たる天然の大森林が幾つかの山や谷を蔽ひ包んで繁

つてゐるところである、鐵道はその間を岩を削り溪を渡つて幾つかの寢覺や棧のやうな險難奇勝の間をひた上りに上つて行くのであるが、一度これに乗じてその駛るところに從へば忽ちにして山を登り忽ちにして谷を下り、窈窕として宛ら神仙に遊ぶの感を起さしめられる。かうした事業區はこの谷全面に亘つて二十一もあつて、そのうち御嶽、玉瀧、小木曾の三事業區はこの小川のそれと共に最も規模の大なるものとして知られて居るものであつて、いづれも毎年七百二十町歩づゝ皆伐して百二十年を以て一週すべき大計劃の許に着々仕事は行はれて居るのであるけれども、何をいふにもざつと見積つても一億二千萬石といふ木材が蓄積されて居るのであるから、

チツポけな人間が二千人や三千人どんなに斧を振り翳したところで巨きな自然の眼から見れば髪の毛一本引抜かれた程にも應えないのである。

この大きな森林は悉く帝室の世傳御財産に屬し、最近數年間の統計によると毎年五十萬圓近くの斫伐を續けて居るのであるが、それは伐木樹齡を百二十年と定めてあるので一週り週つた翌年からは復初めに植付けた部分から切始めるやうになつて居るので實に文字通りの無盡藏といふことが出来る。而してこの澤山の森林のうち林相の最も美しい部分を七千町歩だけ選抜して二十一年目毎に造營する伊勢神宮の御用材を供給するために特殊な注意と保護とを加えて

居るのである。

かうした巨萬の富は福島町に帝室林野管理局木曾支局なるものを置き、その下に九つの出張所を設けて支局長以下十數名の高等官と百餘名の判任官とによつて管理經營されて行くのであるが、これが伐採から運搬に就いては雇人として傭はれて居る數千のこの谷の住民が先祖傳來の妙技を持つて居つて到底他人の想像が出来ないやうなことを平氣でやつてゐるのである、先づ山には枝下二十間、周圍二間位の大木が一面に林立して天を摩するばかりに聳えて居るのであるが、彼等はその根本に寄つてたかつて恰度蟻がなにかのやうに六尺足らずの體を寄せてストーン／＼と小さな斧を打ちこみ始める

とそこから高い檜の香が鼻をついて發散する。が然し最初のうちは蟻の斧のやうに思はれて居たのがいつの間にか枝は垂れ葉は凋みやがて大きな幹は山谷を打震はせて怪物のやうに打倒される、かくして打倒された巨木は直ちに枝を打落され皮を剥ぎ取られ二間乃至三間の長さに切りさいなまれ、切口には夫々嚴しい幾つかの烙印を押されて、種々な装置を施された木橋のやうな軌道の上を最寄りの谷間へ滑り下らせられる、それが終ると十月の初旬頃から各所各所に僅な谿の流れを堰止めて造られた幾つかの池を岩の間を盤旋して宛もバナマ運河を通ずる汽船のやうに次から次へと送られて次第に木曾川の本流へ運出されるのである。

本流へ運び出されてからは、愈本式の大川狩となつて十一月から二月迄といふもの殆ど水の色も判らない迄に夜となく晝となくひつさりなしに流される、要所々に多数の人夫が長い鳶を手にして岩の間に懸つたり渦まく淵に漂よつたりするのを押流するのであるが、それでも尚ほ俄雨で水嵩の増した翌日などは河原一面に檜の原となつて仕舞ふのである。かくて木曾谷を抜出した何千百萬本の木材は悉く美濃國可兒郡なる鋪織の網場に一度かき集められて大きな筏に組まれたのち凱旋の艦隊のやうに非常な勢ひで熱田の海へ乗り込まれる、そしてそこから汽船に乘せられたり汽車に積まれたりして東京深川の貯木所やその他の地方へ運ばれて到るところに木曾檜

の高い香を放つのであるが、これもやがて前述の森林鐵道の計劃が完成した曉は山から落された木は直ちに汽車に積まれて中央線の各驛から四方八方に運出されることになるであらう。

是等の大きな森林は前にも述べたやうに今は殆どその十中の八九迄は御料林として帝室林野管理局の管下に屬しその殘餘の部分が僅かに山民の爲めに遺されて居るのに過ぎないのである、而かもその僅かの民有林は孰れも荒廢して山骨の現はなるか然らざれば岩石の崎嶇たる磽确の地に限られて居るので二千年來恣まに採り恣まに食みて盡くることなき天恵を樂ひて來た五萬餘の山民は、明治六年に突如として行はれた官民境界制定に當つては宛も寢耳に水の如

き驚愕を以て死力を盡して争つて見たが更にその甲斐がなかつたので、さらに越えて二十二年の御料地編入に際しては到底理窟では克てないものと見てとつて終ひには各村擧つて内規を設けて大びらな製材所を作り村民一致して大盗伐を初めたのであつた、無論彼等の心持では昔の儘の當然の権利でもあるかのやうに考へて居たのであつたらうが時代は既に變つて、かうした仕事は明かに盗伐の罪名に問はれて一々檢擧されるやうになつたのであるが、終には其都度何十人何百人といふ人民が連累者であり且つ又村のものはかうして檢擧された罪人を送迎するに宛ら戦勝の勇士に對すると同様に寧ろさうしたことが名譽であるかのやうにまで考へらるゝに至つたので

偵の司法當局も却つて閉口して知事や郡長の力を借りて説諭をしたり境界改定の協議などを持出さうとしたけれども當局者の腹の底を見てとつた人民は如何に呼出して境界調査に立合ふことを避けたり説諭などの會合へは顔を出すものさへなかつたので全く手の付けやうがなくて年月を過ごした、然しその後漸次當局の努力が功を奏して遂に明治三十四年には町村に御料林愛護規約といふものが出来上つて各自調印して爾後盗伐を止めるのみならず心を協せて御料林を保護するといふ善良な人民になつたのである。それから後四年、明治三十八年の七月二十五日に至つて、畏くも明治天皇の御手許から毎年一萬圓宛二十四ヶ年間御下賜の恩命があり同時に二十二年以

來この事に奔走した功勞者に對して一萬三千圓の御目錄が下げられて聖恩鴻大遂にこの山谷の民草を濕はすに至つたのである。

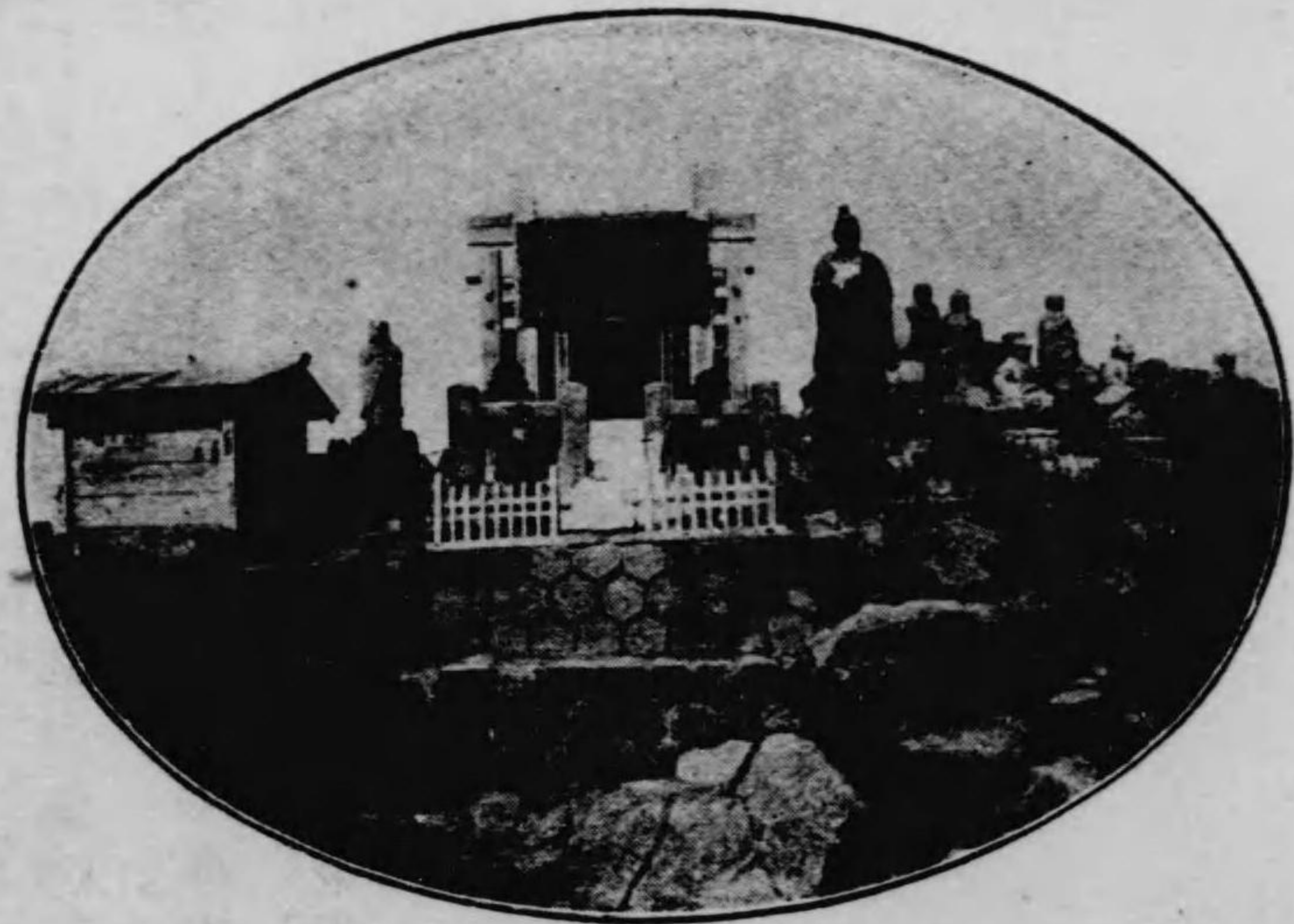
そこでこの恩賜金は住民の殖産資金に充てるやうにとの御思召に基き毎年その十分の八を以て各町村の恩賜紀念林を造成し他の二を以て現金の儘積立て、町村の産業組合に貸付けることにした。今日木曾山中到るところに見らるゝ恩賜紀念日七月二十五日と記した標柱は實にこゝに由來するのである。

斯くして出來た恩賜紀念林は毎年着々と歩を進めて既に千町歩近くも植栽されてゐるのであるが二十四年間には少くも二千町歩は出來大正四十四年即ち造林着手から五十年目に及べば間伐収入のみに

ても年々十五萬圓位の収入は有る譯になるのである、又殘餘の積立金にしても七十五年後に至れば五朱利としても二百萬圓に達するを以てその利子も亦年々十萬圓となり此谷の住民は全く町村税の負擔を免れ得らるゝことゝなるのである。

御料林のことゝ恩賜紀念林のことゝにつきてはこれを以て大要を盡して居るのであるが何れにしても舞臺が思切つて大きいだけに何かにつけて大きな問題が残されてゐるのである、椎茸松茸の人工栽培、薪炭製造、製紙木工等の事業も近時盛に企圖されつゝあれども製紙事業を除くの外は未だ以て郡産業として擧ぐるに足る程のものが認められない、が然しやがてこの大きな自然の寶庫からは世界を





社 本 上 頂 嶽 御

信  
仰  
の  
山

驚倒させるやうな大きな産業が生れなければならぬやうに思はれる、而してこの来るべき大生産の準備として現に豫期せられつゝあるものは實に木曾川利用の十萬基電力発電所の建設問題である。

登山者毎年數萬に上る信仰の山——山上の守護神——壯大なる頂上の展望——二  
の池のお水——神秘的靈場を損はんとする科學の暴狀

木曾福島驛の乗降客が一日百人内外といふ平均數から、ずつと上つて昇降夫々二千何百人といふ突飛な數字を示したり、日に幾通としか受附けのない公衆電報の取扱ひが五十口にも達したりする夏の木曾には、白衣の姿に入角の金剛杖をついて、檜の編笠に鈴を吊下けた御嶽登山者が、谷一杯に入りこんで、福島町の町から十里に近い山道は、蚯蚓についた白蟻のやうな光景が青葉若葉の間を縫つて是所彼所に纏接される。その數年内五萬人と言へば、七月十五日に山を開いて九月二十日に閉づる迄六十日間、眞夏の盛りの晴れた朝には三千四千の登山客も珍らしい數とは言はれない。

山の主は大己貴命、少彦名命の二神、光仁天皇の寶龜五年六

月十三日、信濃守石川朝臣望足の祀るところと歴史には記されて居るが、その頃より疫癘を穢ひ萬民の苦患を除く神徳の遍ねかりし事は、醍醐帝の御代に、京都の公卿、白川宿衛少將重頼が遠くこの神の威靈を聴き傳えて祈誓をこめたといふ物語の傳えらるゝによつて見ても伺はれる。

山は海拔一萬七百七十四尺、最高峰は劍が峰と呼ばれて、數多き噴火口のうち、周圍一里に餘り最も高く最も大なりと言はるゝ所謂一の池の東に屹然として聳え立つてゐる、そこに黒澤口奥社なる縣社即ち御嶽神社の本體が祀られてゐる、劍が峰をめぐつて繼母岳、奥の院峰、摩利支天峰、繼子岳などの諸峰が外輪山の形に並び立つ

て中に五つの池を湛えてゐる、一の池の西南、地獄谷には今尚ほ二個の噴氣口があつて、そこから鼻をつくやうな硫黄の氣が噴出されて居る、二の池の中央には直徑一町餘りの天然の貯水池がある、水は清冽深秀、青きことは藍の如く冷たきことは氷のやうであるが、いまだかつてこの池の中の探検は試られたことが無いと傳えられてゐる。

頂上の展望は高山の常として雄大森渺たることは富士も淺間も異なるところは無いけれども、此山が特に、信美飛三州の間を繆ひて、遙かに北日本海に到る迄脈絡として半宵を摩して樹つ日本アルプスの連峰の頭、字ともいふべき大きな起點となつて、北に乗鞍

穂高鎗ヶ岳等の峻峰を始めとして次第に淡く靄がくれゆく烏帽子岳  
獅子岳蓮花岳地藏岳白馬岳などの連峯を數へ、東に近く駒ヶ岳八ヶ  
岳の奇峭を望み、西南には圓き惠那山を前卓として遙かに遠く富岳  
を指すの壯觀は蓋し海内無雙と稱するも溢美ではなからう。登山者  
は中央線の章でも述べたやうに福島上松の兩驛よりするが普通なれ  
ど、上下夫々この二つの異なつた路を採ることの最も興味あるは言  
ふ迄もない、何れよりするも約九里乃至十里、福島からすればその  
中三里は既に馬車も通ふ迄に改修され残りの七里の中四里餘り、山  
の麓までは現に改修中で數年後には完成の豫定であるが、七里足ら  
ずの郡道に十數萬圓の巨金を投じてまでも險阻な道を切開かうとい

ふことは如何に御嶽登山といふことが此郡の經濟に重要視せられて  
居るかといふことを説明して餘りあるものといふべきである。山嶺  
に郵便局の設けられたのは富士山郵便局に次いで、疾い頃の施設で  
あつて、夏期二ヶ月の登山期には普通郵便の外に小包さへも取扱は  
れて登山客の便宜を助くることは一通りではない。

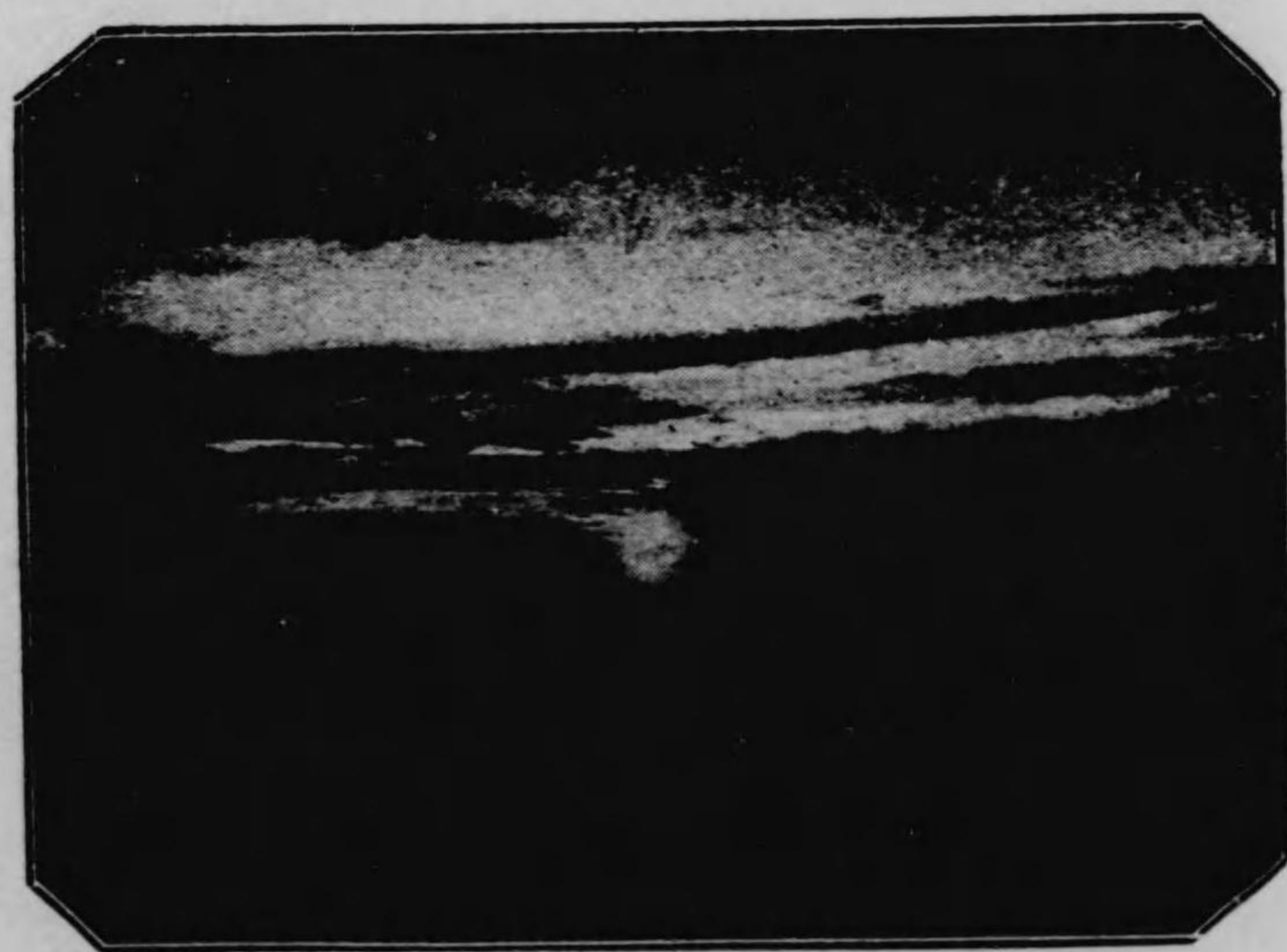
斯くして登山客は年と共に幾分づゝ増加の形勢を示して、關東關  
西は言はずもがな、遠い九州の端から北海道の果迄、何々講と名の  
ついた信仰の團隊が出来て、年々多數の講社の中から代表者が選ま  
れて出掛けてくる、昔は潔齋百日にして漸く登峰が叶つたとか、女  
人は六合目以上は禁制とか傳えられて居たが、今はそれ程の苦行は

要さないまでも尙ほ心身に汚れあるものは神慮に觸れて無事に登山が出来ないと一般に信ぜられてゐる、最近數年來中央線開け山道亦改修せらるゝに至つて、山も自然近代的に開放されて、信仰を餘所にした趣味の登山者が見えるやうになつて來た、往年吉原の傾城三十餘名隊を組み、遂に千古の靈域を踏破するに及び、御嶽山の名は社會のあらゆる方面から種々の意味を以て注意せらるゝやうになつたのであるが要するに久しく神仙の靈峰として尊崇されて來た幾多の神祕的の分子は次第に解剖と分析とに飽くことなき近代の科學にその領域を奪はれ、今は殆ど富士や淺間と同じやうに地殻の上に出來た一つの大きな皺に過ぎないものとして天下に公開せられんとす

るに至つたのである、されば夏期の休業時期にあつては美術學生のスケッチの舞臺とされ植物學者のためには高山植物園と考へられ、これらの學者探検者によつて應ては、神のお水として頻死の患者を救つた二の池の水も酸素と水素の化合物に過ぎないことを立證される時期も近づいて來たのである。

是非か、吾等は姑くこの論に立ち入ることを好まないものであるが、過激に手を擴げた近世の科學文明が、吾等の幸福を自由な世界から、あらゆる瞑想や妄想を奪取つたり若しくは蹂躪して仕舞つたことは、その悉くが必しも欣ぶべき現象であるとは思はれないのである。

御嶽山由來記



山の頂の日の出

此の一篇は正史のよるべきものなく、只此地に傳えらるゝ傳説と後年編冊せられたる二三の由來記の一節とより、その筋書の比較的真相に近しと思はるゝものゝみを選び、ほしひまゝに潤色したるものなり

一

福島から西へ一里餘り木曾川に沿つて下つて行くと板敷野と呼ばれる場所に、とある小高い丘があつて、その麓には年經たる老蘭が一幹千年の雨風を凌いで立つてゐる。そしてその根本には無心に掻き崩されてたゞ僅かにその面影ばかりを止めた小さな塚があつて、その昔し醍醐の御代に都から遙々と下向した白川少將の愛兒阿古太丸が憤死の場所と傳へられてゐる。丘は木曾川と王瀧川との合流點に臨んで、西北に廣く開けた王瀧川の溪谷から遙に遠い御嶽の雄姿を雲上高く仰ぐところ、今はこの近くに遙拜所さへも設けられて思はず道行く人の足を止めさせるのであるが、この小さな塚を中心として今から大凡一千年の昔に、世にもあはれな一篇の悲劇物語が傳へられてゐるのである。

頃は人皇六十代、醍醐帝の御代のこと、京は六條近く洛の外れに白川の宿衛少將重頼とて時めける一人の公卿が住まつてゐた、奥方は皁月の前と呼ばれて容貌も美しく、佳人才子の配偶何一つ備はらぬことゝてはなかつたが、唯四十を越した二人の間にたゞ一人の子

供さへも出来ないのが唯一の、そして他のすべての幸福にも匹敵すべき程の悲しみの種であつた。

でかうした二人の間には折にふれ事につけて、定まり切つたやうに子供のことと言ひ出されて一人がどんな財寶を捨て、も只一人の子寶を欲しいといへば他の一人はいつそのこと打ち連れ立つて諸國の名勝や古蹟を遍歴してあぢきなき、餘生を過ごさうとまで言ふのであつたが、或る時遠い信州の木曾といふ山奥に鎮座する御嶽神社の御利益があらたうて如何なる願ひも立所に叶えられるといふ福音が不圖したことから二人の耳に傳えられた。

無論その結果は早速に三七二十一日の祈願とあつて、二人は男女何れにてもあれ一人の子供を得させ給へと一心不亂に禱つたのであつたが、不思議にもその頃から皁月の前は月の障を覚えて十月の後には體て二人が血に神の御靈のこめられた美しい女の子が生れた。

子供は神の申子といふので直に利生御前と名づけられて、一家は俄かに祝福を加え、六條の大きな少將の邸には、御嶽の主座神、大穴貴神少名彦神の兩神が祀られて、朝な夕なに掲げられる燈火は幸福なこの一門の前途をのみ照らすやうに思はれたのだが、さる間に

も姫は雙親の厚い情に育てられて最早四歳の春を迎えた。

かくて夫婦は心から御嶽神の神徳に歸依して朝夕の勤行はもとより東の間の神の恵を忘れることはなかつたが、赤心神に通じてかその年の暮にはまた玉のやうな男の子が儲けられた。物語のヒーロー阿古太丸がそれであつた。再び三年の歳月が甘い夢のやうに流れた。父の少將は今はや五十路の坂に近づいて、帝の信任もいよゝゝ篤く、貴い名門の血に神の胤を宿した二人の子供は、姉は六つ弟は三つに生立つて、幼ないながらに世の常のそれとは異なつた美しさに輝いて、永久の春のやうな欣びが一家をとりまいた。

一一

皁月の前はもとよりその容色の美しいやうに心ばえもしとやかではあつたが、何時の頃からか斯うした久しい間の夢のやうな幸福な生活に慣れ過ぎて、どうかすると御嶽神の神徳さへも忘れて時には朝晩の勤めも自然に怠たるやうなことさへあつた。意地のわるい悪魔は常にかうした幸福の家庭を付けられつてゐるのであるが、そのころからとうとうその



残忍な翼をこの幸福に酔つた一門の上に擴げはじめたのである。

やがてその年も暮近づいて慌しい時雨が落殘つた枯葉を打つころ、ふと皇月の前は風邪の心地で枕についたが其儘かりそめと思つた病が俄かに重つて醫者よ薬よと手當の限りを盡したのであつたが、神の咎めを受けた身には如何なる介抱もその甲斐がなくて、遂に冷酷な死の神は頑世ない二人の兒供達から永久にその最愛の母を奪ひ去つて仕舞つたのであつた。

全く思ひもかけないこの不時の出來事に、六條の少將の邸には急に重たい黒雲が覆ひかかつて來たのであつたが、とりわけて二人の姉弟は、いつまでも母の墓場に泣き伏して「此儘母様の許へ連れて行つてたべ」と喚いては墓標にとりつくのであつた。

かうした子供達の愁嘆を見るにつけて、最愛の妻を失つた少將の悲しみは一しほ深さを増すのみであつたが、然し寄る年波の最早五十にも近づいて浮世の榮華も仕果した身の、今は妻の遺れ形見の美しい二人の子供を相手にその行末を楽しむ境涯には、淋しいながらに安らかな慰めもあつて、思つたよりは幸福な月日が三人の間にさらりと流れて何時し

か姫は十六、阿古太丸は十三の春を迎えた。

で、なくてさへ姫の十六といへば美しい盛りに人の眼を惹くのであるが、生れついでに利生御前の容姿には人間としての美しさの上に、言ふに言はれぬ神々しさへ加はつて、宛ら此世の人とは思はれぬばかり、京の町には姫の名が御嶽山の名と共に隅から隅まで擴がつて行つた。

若し此儘に同じやうな月日が經つて行つたならば、この二人の姉弟のためにこのやうな悲しい物語は起らなかつたのであつたらうに、運命の奇しき力には如何なる權勢もどうすることも出來なくて、つひその頃から二人にとつては永久にとりかへしのつかない不幸の日が初まつた。それはこの二人の爲めには新しい二度目の母——邪慳なもの、引合ひに出される繼母を持たなければならぬことであつた。

そのころ同じ都に徳大寺の左大將とて飛ぶ鳥も落すばかりの權勢を極めた公卿に、白萩御前といふ一人の美しい姫があつたが、お情深い帝には豫てから妻を失つて佗しい思ひに月日を送つてゐる重頼少將を哀れと思召して居られたので、まだ二十にもならぬ白萩をば、

六十にも餘る少將の新妻にと強ひて仰せ出されたのであつた。

少將は今ももうそのやうな心も失せて一途に子供の成長することのみを楽しみにしてゐるのであるから、帝のお思召を有難くは思ひながらも御辭退申上げたのであつたが、一度言ひ出された帝の繪旨は犯し難くて、つひそこから程遠からの新莊に立派な館を新築して、そこへ左大將の娘白萩御前を迎えとつたのであつた。

三二

貧富貴賤のけぢめは世を渡る人の身の上こそあれ、好悪愛憎の人の心には今も昔も變ることなしと古の人の言つたやうに、まだ二十足らずで二人の子供の繼母とならなければならなかつた白萩御前には、天晴れ名門の家に生れて深窓の許に養はれた貴い身分に似もやらず、いつしか世の常の淺間しい女心といふもの、據になつたのであつた。

それに無論少將は、一度は御辭退申上げたとはいふもの、帝の繪旨に従つて美しい新妻を迎えたことはまんざら嬉しくないことでもなかつたので、そしてそれから引續いて奥州

五十四郡御下賜の有難い恩命が重れて勅諭あつたので、今は少將の權勢飛ぶ鳥も落すばかりとなつたのであるが、それについても帝の繪旨と左大將を父を持つたこと、この二つの後継は、次第に白萩をして夫の少將をも尻に敷き人を人とも思はぬやうな嬌慢の心を育くませるに充分であつた。

そして又そこには月苦つきさかといつて腹の悪い乳母が附添つてゐた、彼は自分の手に育て上げた白萩が今の榮華を盡す身となつたことを欣ぶと共に、口さがなき京童の間に、見も知らぬ先の女主人が遣れ形見の利生御前が、いつも白萩と比べられては讀めそやされるのを聞く毎に、宛ら生れついで自分の仇敵を賞めそやされてもするやうな氣がして、腹を立てて終ひには有ること無いこと搦交せて姉弟の悪口を様々に言ひこしらへて白萩御前に告げるのであつた。

とかくする中に愈時が到來した、それはまづ一番に阿古太丸をば亡きものにして、それから後についで利生御前をかたづけやうといふ怖ろしい陰謀——それが花のやうな美しい白萩の口から密つと月苦の耳へ傳えられたのであつた。

斯のやうな怖ろしい企みが假りにも現在の自分の母親の手に回らされて居やうなどは神ならぬ身の固より夢にさへも知る筈がなくて、或日阿古太丸は平常のやうに只一人の耶麻時常を召連れて亡き母の墓に詣で、種々の供物などを供えて、繼母の此頃のつれない振舞ひを思ふにつけても眞の母の在はすならばと獨心ゆくばかり墓標の石にとりついて泣いたのであつたが、その歸り途を新莊にとつて久々にて戀しき父君に逢つて、ありし昔を偲ばんものと、土産の菓子も携えて父の館を訪づれた。が然し咒はれたる阿古太丸の悲しき運命は何處までも動かすことは出来なくて、平常ならば邸にあるべき筈の父の少將は、帝の命の俄かのお召によつて折悪しくも恰度御殿へ出仕の後であつたので、阿古太丸は暫く少將の歸りを待つて見やうとも思つたのであつたが、時こそ來れと待設けて居た白萩は巧に言葉をして俄のお召にて今しがた參内したばかり故歸りの程は覺束ないと乳母の月苦に言はせたので、阿古太丸も今は是非なくて持つて來た土産の菓子を残してすこゝと立歸つたのであつた。

願望成就と顔見合せて微笑んだ白萩と月苦とは少將の歸らぬ中の謀と勇み立つて豫て用

意の毒藥を巧に菓子の中に調合して素知らぬ顔をして待ち受けた。

無論このやうな奸計のあらうとは夢にも知らず程なく邸に立歸つた少將は、月苦の手によつて持出された見事な菓子が、いとしい父思ひの阿古太丸の心盡しの土産物と聞いては老の眼に包み切れぬ嬉し涙さへ浮べて、手早くその中から一つを取上げて口に入れやうとするのを、白萩御前は不意に氣がついたやうに暫しと押止めて、如何に親子の間とは言へ萬一のことがあつてはならないからとて尤もらしく傍に侍つて居た禿童に毒味をさせるやうにと言ひ出した。

この申出しには少將も否み難くて手に持った菓子を其儘件の童に食べさせたのであつたが怖ろしい毒の力は忽に童の五體を紫色に染めて、少將の驚き騒ぐ間もあらせず、烈しい吐血と共に其場に悶絶させたのであつた。

「淺間しや阿古太丸！」と白萩はさも感激に打たれたやうに獻り上げた。

遂に阿古太丸は放逐の最命に服さなければならぬことになった。

勿論自分ながら露覚えなげな潔白なことは自分から父の少將に對面して訴へたらば分明しやう、よし月苦や白萩がどのやうに讒言するともこの赤き真心が何よりの心證、一時は言ひ負かざるゝことありとも神様は何時迄も打ち捨てゝは置かれまい——阿古太丸はかう決心して立上つた。

折柄奥の襖を開けて、兩方の眼を泣きはらした利生御前が轉るぶやうに驅出して、今し血相換えて立上らうとする阿古太丸の袖を纏るやうに押へた。

のう阿古太丸や、仔細は今時常に聞いて始めて知つたなれど、何故そなたは今迄この姉にこのやうな大事を打明けては下さらぬ——母様に死に別れ、頼みに思つた父上も今はあの通り、鬼のやうな邪慳の心を包んだ顔や言葉の美しさに此頃ではもう妾等のことなどはさら／＼思ふては下さらず——のう阿古太丸、そなたがこの都を追はれて何處とも知れぬ旅空に迷ふて行くといふのなら、この利生も一人で殘つて何とせう、そなたはまだ頑世ない乳飲み頃であつたから何事も覺えては居られまいけれど、妾等の母様は顔形こそは今の

母様ほど美しくはなかつたけれど、心はまことに花のやうに美しい母様で在せられた、その母様が臨終の際に——あゝ今思ひ出しても涙の種だが、細く瘦せた白い腕をさし延べて妾の髪を撫でながら、「母様が亡くなつたならば、お前が阿古太丸の母様ぢやあぞよ」と仰せられた、のう阿古太丸——」

利生御前は泪に曇る聲をつとめて訴ふるやうに掻き口説いた。

「お二人が此のお邸をお出になるなら、この時常も老の身の一人居殘つて何の楽しみもない身の上なれば枉げてお供をさせて下され」と何時の間にか郎黨の時常もその場へにぢり出て、泣き喚くのであつた。

が、三人類を集めての相談の結果は、今事を荒立て、白萩御前の悪だくらみを世の中にさらけ出しては、斯程迄に寵愛して居る父上へ對しては不孝となり、輪旨を以て仰せられた帝の御眼識をあばいては不忠となつて恐れ多いことであるから、一と先づ阿古太丸一人父君の命令に従つて先に落ちて行くことにして、そのうち折もあつて阿古太丸の身の潔白なことが父上に知れたらば、直ぐに時常を迎ひとして差向けやう、若し又運拙なくてそれ

も叶はずば聽て利生御前も時常も阿古太丸の後を追つて物に都に逃れ出てやう——といふことに決着した。

落ち行く先は奥州白河、幸ひそこに父少將の舅にあたる氏家卿といふが五十四郡の抑えとして威勢を振つてゐた、そこに三人は聽て落合はうといふのであつた。

「さらば姉上——」

「さらば阿古太丸——」

雪のやうに眞白く置いた霜枯れの京外れのまだ明けやらぬ野邊に姉弟二人が往きつ戻りつ、これが今生の別れとは知つてか知らずしてか、抱いては別れ、別れてはまた抱き合つて盡きの名残を惜んだのはその翌朝。年も早や暮れに近づいて、北陸境ひの山峰には最早白い雪さへ見えてゐた。

五

年は暮れ春は回つて聽てまた野山には十人十色の心に若葉が芽を吹き花が咲いた。

その頃、阿古太丸はたゞ一人、履きも慣らはぬ草鞋の紐に小さな足を痛めながら信濃路は山又山の木曾の谷をとぼ／＼と辿つて居た。

あはれ世が世なりせば天晴れ石川の少將重頼朝臣が嫡男とて、行末は蓮府槐門の華燼をも撞にすべかりし身の、今は見る影もなく哀傷の涙にかきくれて西も東も見えわかぬ山路の旅に魂を消す。行旅幾日、暮るゝに早い山峽の春の一日は、暫らく足を休めやうと、とある岩角に腰を卸したこの小さな漂浪者には餘りに早く暮れすぎて、現ともなく疲れた身體を横たえたその枕邊には、無情の春の夜の暗い暮とほりが襲ひ初めて、ともすれば勞れた臉が自然につき合ひさうになつて來た。

それから幾時間か経つた。旅の勞れと風邪の熱とで、岩の間に身を横たえた儘我れを失つた阿古太丸は、そこから、程遠からぬ山里のいぶせき小屋の一室で、主夫婦の厚い情に介抱されて再び我れに返つたのであつたが、假初めと思つた病氣が次第に延びて主夫婦の眞心こめでの看病も一向に效を奏さないのみか卯の花咲いて白い雲が峰から峰へわたる夏の初めのそのころから病氣は重る一方で、また年若の元氣盛りの子供故大丈夫と自ら自分

に引受けた主人あるじの心頼みも今はどうやら覺束なくなつて來たので、或日主夫婦は阿古太丸の枕邊に座つて泪ながら、「若し何なりと望みがあるなら叶はせて進ぜやうから遠慮なしに仰せられよ」と言ひかけた。

阿古太丸はとても助からぬ命とはもう疾うから覺悟はしてゐたものゝ、ならうことなら斯のやうな手厚い看護をしてくれる主夫婦へ、言葉ばかりのお禮なり述べたいものと思つてゐたので、寒れた體を纒まかに擡たげて、うち震える手に主夫婦の手をとつて押戴おしきながら二人の情を厚く禮を述べて、「素性とても別になけれど、たゞ一度御嶽山の御社に詣で、願つた心願を果たさず此儘死ぬのは餘りに口惜しいから、せめて此上の情に出来ることなら此世で一目御嶽のお山の峰だけでも拜ませて賜はれ」と苦しい息をつきながら二人のものを拜まんばかりに言ふのであつた。

斯うした阿古太丸の赤心は義侠に厚い主夫婦を動かした。

「のう旦那、どうせお助け申すことが出来ないものなら、せめてお山の拜まれるところまで今のうちにお連れ申して一生の願ひを叶えて上げたらば却つて功德にもなりませう」と

女主人は泪を抑え、口を出した。

「俺もそう思つて居る所ぢや、どれ、私が負つて進ぜやう」と主人は決心して立上つた。

阿古太丸は今二人の情でお山の拜まれるのを嬉しさに主人の仕度するのも待ち兼ねて料紙とりよせ、今は辭世の一首を書き記した。

「この山に捨つる命は惜しからず

飽かて別れし父ぞこひしき」

主人は大事に阿古太丸を背負つて、そこから一里ばかりの山道を休み休みして漸くとある小高い丘の上へ着いた。そこへ持つて來た進を敷いて、その上へ阿古太丸をそつと下ろして様々に介抱しながら、「あれあの雲の上にお山が見えます」と遙かに遠い西北の空を指した。

「あれがお山か、有難い！」と言ひながら阿古太丸は主人の體に身を靠せて僅かに眺まづいて手を合せたが、不思議にも其儘兩方の眼は靜に閉ぢて主人に寄りかゝつたその胸には最早夜のやうな冷たさが漂よつてゐた。かうして主人の驚きも悲しみも遂に運命の力には

克てなくて、總てそこに一基の墓標を立てられ小さな印しの松が植ゑられて、六月十三日の夜の月はその上に重たい露を結ばせたのであつた。

六

露繁き木曾の野山を冷たく照した六月十三日の夜の同じ月は、その同じ光に京の街を包んで、木立しげき新莊の館には死のやうな静寂な氣がとりまいた、その夜——夜も更けた丑滿の頃、少將の枕邊に髪はばら／＼に振り亂され顔色は死人のやうに青ざめて見るからに身も魂も消え入りさうな恐ろしい形相をした一人の女が悄然と立つて居た。少將は驚ろいて悲鳴を擧げながら起き上らうとしたけれども咽は錆びついたやうに聲も出なければ手足は釘で打つけられたやうに一寸の身動きも出来ないで、顫えながら女の様子を見詰めて居ると、女は暫らく無言の儘立つて居たが、總てさめ／＼と泣きながら白い衣物の袂から一片の紙切れを出して、透通つたやうな細い手を延べて少將の目の前近く差出した。紙には「此山に捨つる命は惜しからず、飽かて別れし父ぞ戀しき——御嶽山の麓にて、

阿古太丸」と記された文字が、どこからともなく射しこむ光のやうに淡闇を通してはつきりと浮ぶ迷ふ方なき阿古太丸の筆の跡、女はそれを少將の胸の上に載せて、兩方の眼から瀧のやうに流れ落つる涙を拭はうともせずちつと少將の顔を見詰めたまゝ何時迄も／＼も立つて居るので、少將も今は絶體絶命、怖々ながら女の顔を睨め返して居ると、青く瘦せて姿は變つて居りながら十年前の臯月の前そのまゝの顔容。「お、お前は臯月だつたか！」と渾身の勇氣を振立て、思はず。聲音に叫んだが、その儘女の姿は淡闇に消えて、あとには微かな短檠の光ぼんやりと淋しく對立の影から斜に襖を照らして居るばかり、少將は急に胸の重みを覺えて跳ねるやうに起上つたが紙切れらしいものも落ちては居らないので、其儘廊下傳ひに中庭へ出て、まだ明けやらぬ爽やかな夜の空氣を吸つて佇んだ。

折柄今迄澄んでゐた空は東の方から俄かに曇り初めて月は赤くどんよりと霞み、如何さま不安の氣配ひが漲つてくるかのやう、少將は其所にもまた居溜まらなくなつて、そつと兼戸を開けて露にぬれた街の方へ歩いた。

「いや、あの歌が本當かも知れない、なんてあの親思ひの阿古太丸が自分を亡いものにし

やうなと考へやう」

少將はかう一人胸の中に繰返しながら、つひ今迄枕邊に立つた臯月の姿や、別れて久しく違はぬ阿古太丸の身の上など思ひ廻らしては矢鱈に胸がおしつけられるやうな苦しさを覚えて少しの間もちつとしては居られない——「いつそのこと、此儘久振りで六條の邸を尋ねて着ない利生の顔を見たならば又思ひ直すこともあるかも知れぬ」

かう思ひついた頃にはもう少將の足は六條の邸の方へ向いてゐた。

同じやうな臯月御前の姿は同じ時刻に利生御前の枕邊に立つた。

「時常」と利生は靜かに郎黨の時常を呼んで縁側に指込む同じ赤く曇つた月影を落ち付かぬ心に仰ぎながら、「可哀さうに阿古太丸は最早此の世のものではないかも知れぬ」と夢の仔什を物語ると、時常は男泣きに泣きながら、

「ではお姫様、これから時常がお供をして、どのやうな山奥なりとも屹度行方を捜して進ませよう、さあお姫様、かうしてゐては次第に決心が鈍ります、さあ御仕度あそばせ」と眞の情を知つた時常は早くも立上つて利生御前を促した。

恰度その時、勝手知つた裏庭の植込みを分けて近づく人の氣合ひがして、二人が怪しい曲物と氣がつく程もあらせず、柴垣の外から聲がして、「時常に利生姫が——重頼ぢや」と呼びかけられた。

七

「もう此上は白萩御前や月苦を糺弾して罪科に服せさて見たところで、この悲しく傷はれた吾等の胸が幾らかでも繕はれることは思ひもよらないのだから、一層のこと此儘汝達のお供をして、野に臥し草を分けても阿古太丸を尋れ出して、今一度主従四人の楽しい昔の暮しに立歸らう、いざ早く、夜が明けては事面倒ぢや」

少將は今全く夢の覺めたる心地がして其儘人目にかゝらぬ間に三人打連れ立つて阿古太丸の後を追はうと決心したのである。

「父上様、そのお言葉は妾にはどのやうな浮世の榮華よりも嬉しうございます、そのやうなお情けのあらうとは存ぜずに、つひ今の母上様のお出ましてから、つれない父上様と、



かりにもお怨み申上げたことが口惜しうございます、——それにつけても阿古太丸は、若しや只今の夢が眞でございましたら——」

利生御前は餘りの嬉しさと悲しさとに殆ど我を忘れて少將の膝に顔を埋めたまゝ聲を立てて泣くのであつた。

「何も言つてくれるな、吾等は是れからどのやうなことがあらうとも、もう汝の傍を離れまいぞ、いや假令一日でもこの上汝と分れて何でこの世に長らへやうぞ」

「あゝ嬉しい、父上様、妾ばかりがそのお言葉、一人て聞くは勿體ない——」

抑え切れぬ極度の感情に利生は身を顛はせて獻り上げる、その度毎に漆のやうに黒い波をうつ髪の毛を撫でながら、月の沈んだ西の山の端をぢつと視詰めてゐる少將の手の上には熱い涙が溢れ落ちた。

「さあ用意はもう整ふてございます、これに草鞋、これに菅笠、——さあ利生様、長々お待ちなされた、その時が今、只今到来いたしました——」

時常に勵まされて父子二人は一度に立上つた。

「此儘行かう、何もかも思ひ出しては心が迷ふぢや」

少將は素鼠輪子の寢衣に時常の持出した麻の白い袍を其儘重ねて、早くも今来た柴折戸から外苑の植込みへ出た。そこから人目に立たぬ路次を辿つて、明け易い夏の夜の東雲つぐる頃には最早なつかしい京の街は灰白く霞の中に隔てられてゐた。

「のう利生や——あすこに見ゆるあの小高い森は恐れ多くも大内裏のお在しますところぢや、その左の——あれ、あの木立の茂つたあたりが吾等が六條の邸跡ぢや——見取めぢや姫」

三人はとある橋の袂の小高くなつたところに立つて三人思ひ／＼の心に住みなれた京の町に別れを惜んだ。

纏て少將は矢立を取出して、橋の手摺を削つてさら／＼と書きつけた。

「泡沫の、夢の世なればな／＼に

人の心の迷ひぬるかな」

急ぐとはすれど馴れぬ旅路、ともしれば遅れがちな利生御前を勞はつて、とも角も秋

の初め、蟲の聲あはれにすたく七月の末に、三人はやうやく戀しき信州木曾路の旅に辿りついた。

「ともかくも木曾迄は来たのぢや、もう御嶽山は程もあるまいから勞れた姫の足を治して行かうわい」

少將は長の旅路に寢れ果てた利生御前が姿を見るに見兼ねてかう言つた。

「いゝえ、勿體のないこと、阿古太丸に一目なりと逢ふ迄は休息などはあまりに月日が勿體なうございます」

利生は斯ういつて頭を振つた。

秋とはいへどまだ残りの暑さ灼くばかり、道さへわかぬ木曾の山路は、今はいづれも氣ばかりに踏みしだいて、それから三日目の暮方、三人はつひ山路に道を失つて、仕方なしにとある山中の阿彌陀堂に一夜の宿を求めなければならなかつた。

八

「お見掛け申せば都の方と思はるゝげぢやが」

夕餉果て、から話好きな庵の主は、蟲の音に埋まつた縁側ににぢり出て、少將を相手に様々の世間話をした末に、不圖思ひついたやうにこんなことを言ひ出した。

「不思議なこともあればあつたもの——先達、都のものとしてさる高貴の公達らしきが只一人——つひこのさきの山路に迷ふて」

「山路に迷つて——」

少將は恰ど我れを忘れたやうに鸚鵡返しに言つて。主の顔を覗き込んだ。

「道に迷つて、——その上馴れぬ旅と見えて甚い疲れにつひあの山影の岩の上に暫しと思つて憩はれたのが——」

「それがどうなつたと言はるゝのぢや、早くその先きが聞きたいのぢや」

次の間に横になつて幾日かの足の勞れを休めてゐた利生御前は、初めから平常と變つた少將の高い話し聲に聞き耳を立て、居たのであつたが、今はもう耐え切れなくなつて自分から轉ぶやうに二人の前へ走り出てた。

「父上―阿古太丸があゝの山影に迷つて居るのでございませうか!?」  
「さうだ、阿古太丸―」

宿の主は思はず膝を叩いて斯う叫んだ。

「阿古太丸と仰しやいました、――ではその公達が、何か御近親の方でございませうのかな?」

不安の色が此のとき初めて主人の眉宇の間に動き初めた。

「そのやうなことは後で聽かさう、それよりも早くその先きを聞かせて下され」

二人は異句同音に言つた。

「逢はれぬなら逢はれぬと早う言ふて下されのう、それが却つて情とは思し召されぬか」  
利生御前の聲はもうおろ／＼と涙に顔えてゐた。

それから驚畏と期待とに緊張した幾秒かの間を置いて、つひにとり返しのつかない悲しい宣告が絶望したやうな宿の主人によつて傳えられた。

涙に掻きくれた主従三人はそれを聞き終ると主人の留めるのもいつかな耳に入れずに早

くも疲れた足に草鞋を穿いた。

「どうぞ留めて下さるな、一里や二里、この切なる氣ばかりでも歩かれませう、若しこの身體が岩に碎かれて粉のやうになるならば、それこそ妾が本懐、さあ時常、早う案内して下され、妾はもう阿古太丸が此世になくしては一日片時も生き長らへやうとは思はれぬ」

庵の主人も見ろに見兼ねてとう／＼自分から案内しやうと言ひ出した。

三人は主人を案内に更けゆく夜の露を踏んで痛い足を引きづりながら、阿古太丸の墓へと辿つたのであつたが、ともすれば幽谷の苔に足を滑らして千仞の底に落ちやうとする利生御前を慰はりながら、或は岩を攀ぢ或は葛かづらにとりついて、峻しい山路を越すのであつたから、思つたよりも手間どれて主従が目指す阿古太丸の墓へ辿りついたのはもう轟の聲さへ鳴き止んで、深山の夜は寛の如く氣味のわるい静寂のうちに沈んでゐた。

「あれが阿古太丸殿の墓でございます」と主は近づくまゝに闇の中に仄白く浮いた石碑を指した。

「どれ、どこに」と利生御前は消え入りさうな勢れた身體を起して眞先きにかけてよつた。

先の主夫婦の情によつてつひ二三日前に建てられたばかりの石碑、表面には阿古太丸之墓と記され裏には辭世の和歌が一首、千年の恨みをのこして刻みこまれた、まだ土の香りさへも生新らしい墓の前に、狂氣のやうに走りよつた利生御前は「のう阿古太丸！利生ぢや姉ぢや！」と二聲三聲悲鳴を擧げて力の限り墓石を揺り動かしたのであつたが、不思議にもそのまゝ五體は石のやうになつて、間もなく三人がついて驅けよつた時には最早墓石にとりついたまゝ息は全く絶えてゐた。

## 九

驚畏も哀傷も希望も何もかも今はみんな一緒に打ち交せて微塵に破らなければならぬ時が来たのである。

「もうすべての終りが来た」とやゝあつて少將は投げ出すやうに言つた。

「時常、お前はこれから京へ歸つて我等が最後を都のものに告げてたもれ、——もうこゝなれば生き長らへても用のない命、重頼はこれより夜明を待つて一度お山に登り、靈現あ

らたかな御嶽神の神前に詣て、年頃の御禮を申上げ、おつつけ姫の後を追ふ覺悟ぢや」

無論時常はそのやうなことで動ずる武士ではなかつた。

「時常生れて君のお情に召使はれ、又死んで昏路の御供仕るはまことに冥加に協つた仕合はせ、先に阿古太丸様が都を落ちて死出の旅路に上られましたその時、既にお供をすべかりし身の、一旦の心に思ひ止つて今日まで生き延びたるも皆これ君の御爲めに命を捨てんが爲め、何と仰せられやうとも、死出の御供せよとならば兎も角、時常は最早一步も御側を離れやうとは存じませぬ」

眞心こもつた武士の言葉は、そこに蹲まつてぢつと先刻からの出來事に驚きの眼を見張つてゐた宿の主はいふまでもなく、既に捨つる命と覺悟を定めた少將の心まです々に引裂かないではなかつた。

「今直ぐと仰せられてこの闇の夜に此先き一寸たりとも進むことは覺束なうございます、それに夜も早や更けたれば夜明けまでには間もございますまい、私はこれより山を下つて巖に阿古太丸殿をお助けなされた百姓を引連れて、登山の用意も致して參るでございま

せう」

「それもさうぢや、よういふてくれた、阿古太丸をいたはつて呉れたその恩人とやらに一度違つて禮の言葉も交はしたし、また詮ないことながら阿古太丸の臨終の模様を聞きたくてならぬわ」

「ではこれから一走り、夜明迄には戻つて來ませう、それまではよう姫様の遺骸を守らせて居らせられませ」

「お、そうぢや、姫の遺骸を忘れてゐた——お、もう冷たうなつて居るわい」

宥の主人は足早に闇の中へ消えた、あとには少將と時常とたゞ二人、闇にもそれと見ゆる利生御前の俯向いたまゝの死骸を挟んで、今は念佛唱える力もなく、たゞ何時迄もくも言ひやうのない闇の重さを各自の胸に感じながら長い沈黙の裡に座つてゐた。

その夜その頃のことであつた。主人を失つた白萩御前は、その後の噂や少將の書き残した詠歌の、今は口さがなき童の口にさへ上らせられるやうになつたので、さしも美しかり

し新莊の館にも居溜らずに、切に月苦と二人、洛外の片田舎に假の庵を結んで世を忍ぶ佗しい生活に入つたのであつたが、今更ながら犯せる罪の思へば思ふほど恐ろしくて、安き日とても無く少將の身の上など案じ煩つて日を暮こして居るのであつたが、恰度その夜の枕邊に兩の眼を泣き腫らした少將が、阿古太丸の墓石の前に顔色青ざめて見る影もなき利生御前と何やら頼りに物語りをしてはさめくくと泣き入る様を、二度ならず三度までも同じ枕に夢みたのであつた。

實に怖ろしきは人の一念、今は白萩も月苦も最早かうして人目を忍んで罪深き命を生き長らへることは自分から許されなくなつて來た。

「のう月苦、妾の胸の痛みはどのやうに思ひ直して見ても、とても此世で治されさうにも思はれぬ、いつそのこと、妾も殿の御跡を追つて、信濃は木曾の御嶽山とやらへ詣で、罪業の埋滅を願はうと思ひ立つたのだが——」

「妾もそのこと此程から切に胸を痛めて居ります」

月苦の心にも良心の咎めはあつた。二人はそれから直に旅の仕度にとりかゝつた。

山川百里を隔てた西と東、今は同じ夜同じ時刻に善きも悪しきも皆人といふ人の心を有つてゐるが爲めに、同じ悲しみの旅に黎明を迎へなければならぬのである。

十

奇しくも編あみなはれたるこの物語の中の人々の運命は、環の如くにめぐり廻つて、つひに御嶽山の麓に同じやうな果敢ない最後を遂げなければならなかつたのであつた。

御嶽神の神前に畏まつて神徳のいや高きを胸の裡に刻みこめた少將と時常とが、下山して阿古太丸の墓の前、利生御前が埋められたまだ黒土の濕りさへ乾かぬ悲しみの墳墓の上に差向つて、絶望した現世から神の在ます光明の世界に旅立つべく、氷のやうな刃を差違えたとき、我れ自らの悔悟の烈しい責めに追はれて、小さな胸を痛めながら、白萩と月苦の主従は、やがて行くべき同じ運命の道に入るために、涙にくれた悲しい旅を東へ東へと急いでゐた。

それから幾日かの後、秋草は露に濡れて道に敷かれ、蟲の音は土に歸つてたゞ太古のや

うな静けさが山と谷とを埋めてゐる秋も未近き朝、杖に纏り足を引摺つた二人連れの女が何處からともなくこの新らしい悲しみの墓場へ辿りついた。

無論それは白萩主従の二人であつた。「昨夜も亦お山へ登るとて都のものらしい女が二人上つて行つた——」かういふ噂が木曾の谷を次から次へと傳えられて物見たがりの女や子供達迄が後を追つた。「さう幾人も腹を切るのは不憫のことぢや、早う往つて止めぢやなるまい」とこの附近の庄の主も共々に阿古太丸の墓へ急いだ。

斯うした世間の取沙汰を後にして二人は木の根を攀ぢ岩を荀ひして漸くのこと阿古太丸の墓近く辿りついたのであつたが、然し、まだ新らしい阿古太丸の墓石を中心として、ぞろりと列んだ四つの卒都婆、——その墓の下に冷たく横はつてゐる四つの骸、昨日までは父とよび母と呼ばれ子と呼び主と仰がれた恩愛の情——それが只嫉妬の心一つ故に無惨にも切り放たれて屍離潰滅、常闇の暗い道に追ふはなければならぬのである、思へば怖ろしき人の心——白萩は墓の前に立つたなり眼も瞬み氣も遠くなつて其儘其所に打倒れた。

折柄がや／＼と人聲がして大勢の姿が木立の間から現はれた、前と後とに同時に起つた

この思ひがけない出来事に暫し茫然と立つた月香は、次第に近づく人影に我を忘れていきなり體の守刀を引抜いて、我とわが胸に押宛てたまゝ白萩が屍の上に打伏した。

村の人々は今日もまた思ひがけない二つの死骸をとりまいて様々な評議をしたが衆議は遂に一決して、そこに四つの墓場の前にこの二つの新らしい骸を埋めて、大神の怒りを鎮めるために大仕掛けのお祭りが催されることになった。

谷々の家々からは一升づゝの糶米が持出されお墓の前には大きな籠が築かれ鍋がかけられて、間もなく澤山の餅が搗き上げられた。總て年寄りも子供もみんなこの惨ましい墓の前に集まつて讀經が初められた。それが済んでから皆でこさへた餅が持出されて其夜一夜を建しき運命に倒れた人々の話に語り明して日の出る迄には山のやうに堆くつまれた餅が一つ残らず平らげられた。

「これでお山のお怒りも解けたらう」と村の人々は口々に言つて家へ歸つて行つた。

それから間もなく帝から有難き宣旨があつて重頼父子二人をば御嶽の大神に配すべしとの勅諭、四郡の人々は直にお受けして御嶽山の麓に新社を建て、六月十三日阿古太丸の命

日を祭日と定めて世にも哀れな物語りを語り傳えたのであつた。

星移り人變つて今はや千餘年、阿古太丸の古墳のみ今僅かにその面影を残存して居るのであるが毎年六月十三日にはこの附近板敷野の農民が阿古太丸の祭田に、一月一人宛寄合つて田植をして、秋になつてそれが實ると又寄り集まつて刈りとつてその日の中に餅について食つて仕舞ふ奇習は昔の儘に傳えられてゐる。



木曾川支流王瀧川

木  
曾  
川



谿川としての木曾川——日本山水論中の木曾川——駒ヶ嶽系の支流と御嶽系の支流——具象美と憧憬美、繪畫と詩——文字通りの山紫水明——鱒と鯀獵——經濟的に見たる木曾川

木曾川はその上流を味噌川といつて遠く源を松本平との境に發ゆる八盛山に發して蜿蜒々々、西へ南へ走るやうに流れて伊勢の海に注ぐまでには延長實に五十五里、二百二十三の支流を合せて五百九十方里の流域をのたうち廻つて居るのであるが、そのうち木曾の谷ばかりでも二十二里、支流を合して流域百方に及んで居るにも係らずその灌溉反別が僅かに二千町歩に止まつて居ることや、或はまた此谷の到る處に架けられた何百といふ橋梁が何れも釣橋にこしらへて中央に一つの柱脚さへも見ることの出来ない事實やは、如何に此川が急流で荒れ狂つた烈しい水が、深い斷崖の底ばかりを走つて居るかを説明するに充分である。それ程この川の流は急にその

水は深い谷底を流れてゐる。従つてその流れは到るところに白沫の急湍を現じ到るところに紺碧の深潭を作つてそしてそれが此谷の到る處に出没して常に偉大な風景を助けてゐるのである。

日本山水論にはこの川を激賞して、『木も繁り石も多く、山聳え淵深く眺望に變化あり、開闔あり色彩あり、比較的あらゆる方面に互つて人の意匠を加ふるに及ばず、自らなる絶好繪畫としての資格に缺けて居らぬは恐らく日本第一の名を許しても溢美ではなからう』と言つてゐる、繪畫の資格に缺けて居らぬことが日本一の景色であつたり、人の意匠を加ふることの不必要なのが世界一であつたりするのならば、人間の技工は此の世の中で一番美しいものでなければならぬ譯であるが、そのやうな理窟は抜きとして兎も角も此論の著者が冷かし半分で讚めて居るのでないことは認めなければならぬ。

凡そ山水といひ風光といふ、言葉は極めて漠然たるものであるが要するにそれは常に山と水と相携帯するところ自然によく調和の美を保つて吾等の美的感情を挑發せしむるものであることは論を俟たないのであるが、それがまた此谷に於ける程それ程よく山と水とが常によく調和しよく相扶けて到るところに高調なる自然美を發揮して居るのは珍らしい。殊にこの川の特徴とするところは、その水の清冽にして紺碧なものと、巨石の磊々として白く輝いて居るのとのあつて、密林を負ひて白浪を噛み絶壁を洗つて深潭を作り、千態萬様殆

ど送迎に暇なき態の趣きにあつて、天下の奇勝と稱えらる、棧や  
寢覺や或は本多林學博士をして世界一と叫ばしめた鞍馬の如き、い  
づれもみなこの山と水との作り成せる大自然の藝術に外ならぬの  
である。

川は水澄み石巨きくして何處美しからぬはなきがうちにも、とり  
わけこの川の數多い支流のうち宮の越と福島との中間に位する大原  
川と福島上松間の王瀧川とは共に床しき趣きは富んでゐる、そして  
もしこの二つに強て區別をつけるならば王瀧川はより多く複雑で幽  
邃である間に、大原川はより單調で明快である、もつと具體的に言  
へば前者に於ては幾多の巨きな岩壁と深淵とがその風致の要素とな

つて居るのに比べて後者にあつては、眞白な圓い石とその間に敷き  
つめられた白砂とが、淡い水を通して銀更紗の模様のやうに浮きあ  
がるその夢のやうな氣分にその趣きの基調があるのである、一つは  
壯美であつて一つは夢幻美である、一つは具象美であつて一つは憧  
憬美である。この二つの外に水量の多いのには黒川、阿寺川、柿其  
川、與川、伊那川、蘭川などがあつて何れも奇趣に富んで居るが、  
概して言へば前の三つはいづれも飛彈山脈に源を發して比較的河  
心長く結構雄大にしていづれも王瀧川の趣を備えて居るのに反し後  
の三つはいづれも駒ヶ嶽連山の産むところとして大原川のやうな白  
い石と美しい水とに特殊の景色を擴げて居るのである。

是等の河流には孰れも澤山の魚類を養つて居るのであるが、就中木曾川の上流、王瀧川、大原川などの上流急湍の奔騰するところに於ては最も上品なる岩魚を産し、下るに従つて赤魚、棚平、鯀、鱒などを盛んに出すのであるが殊に六月梅雨の前後に於ける鱒獵は、此谷唯一の奇觀として知られて居るかの秋の鶴獵と共に特筆すべきものゝ一たるを失はない。

鱒は王瀧川の合流點以下の木曾川何れの地に於ても獲られるのであるが、特に中央線須原驛附近の木曾川を以て第一とする、その最盛期に於ては魚は大きな群をなしてその水面は殆ど銀色の鱗で埋められる、この時不意に横合から鐵砲の一發も打込んだなら幾尾とい

ふ大きなのが直に浮上るのであるが、かうした漁師の襲撃を待つ迄もなく彼等は背と背と擦り腹と腹と擦れ合ふので遂に耐え切れなくなつたものゝ如くに我れも我れもと水上高く躍上つては彼方の瀬の中へ飛込んで行く、それを巧みに抄ひとつては腰の籠に入れるのであるが、時恰も六七月、谷には白雲動き細雨忽ち至り忽ち晴れて若葉の緑新たに薫る木影に依り石を焼いてその上に潑漑たる魚を置き携えたる味噌を塗るの趣味は到底かの泥臭と曳網などの遠く考へ及ばざるところである。

鯀も亦七八月の頃に於て特にこの谷の名物たるに恥ぢないだけの香味を發する、これらは多く夜間に漁るのであつて、魚が荒い瀬を

避けて流れの緩い兩側の淺瀬の岩蔭に砂利を含んで身を沈めて休んで居るのを、一尺方形位の硝子板を底とした木箱を浮べて波を避け別に箱の兩尖端から突出した二つの松明の明りによつて硝子を通して魚の所在を探しながら右手に持った棒の先きに装らへた針で大きな魚の頭を突刺して漁るのであつて、夏の夜の涼みがてらの悪戯としても觀物としても確に一珍奇たるを失はない。

然しながら是等の魚は實際に於てはたゞ單調なる木曾人の生活に幾分の潤色を施すに過ぎないものであつて、よつて以て生計の資となすものゝ如きは極めて稀れである。

木曾谷の經濟上から見た木曾川は幾多の寢覺棧などの景勝が觀

光客の懷から一泊二泊の宿料や幾らかの茶代を絞出させることよりも、或は又籠に滿つ魚尾の朝な夕な若干の赤錢に換えられて漁郎の糧をつがしめることよりも、更にもつと重大の關係に於て遠い昔からこの谷の人々に無くてならないものとして流れて來たのである。それは即ち木曾山林の河下げ運材の大きな役目を果たすために用ひられたのであつて、この關係は遂にこの谷の住民の子孫をして特殊な技能を傳承せしめ人をして木曾人は生れながらの山民溪丁なりと評せしむる迄に至つたのである。此の批評の是非は別として實に木曾川の川下げは遠い徳川時代の昔から幾多の困難や危険を敢てしながらも盛に行はれたる此谷唯一の運材方法であつて、科學文明があら

ゆる方面に應用されて居る今日尙ほ其儘に踏襲されなければならぬ  
不思議の技能の一として多くの木曾人の獨りよくするところであ  
り同時に幾多の木曾人の衣食の資となるところのものである。

然しながら是等の利用はいづれもみな餘りに原始的で餘りに消極  
的であることの譏りは免れない。よしその水は俯して見る程の深い  
峽底を岩に激し岸を嚙むで矢の如く走つて居るにもせよ、遠く八盛  
山の巔に發して谷を流るゝこと二十三里、支流を合する五十三、毎  
秒數千立方尺の水量を以て三十分の一の急勾配を奔馳するこの偉  
大な大自然の力をばもつと人間の社會生存上の實生活と結びつけ  
て、もつと積極的なもつと力そのもの、偉力を直進的に功利的に

利用する方法は無いものであらうか。

斯ういふ考に發足した近來の最も大膽なる計劃の一つとして近  
時かの名古屋電燈會社の水力電氣發電所設置の企でなるものが宛も  
晴天の霹靂の如くに傳えられ既に其中の一部分に於ては工事に着手  
し始めて居るのである。

この計畫は獨り日本内地に於てのみならず、人類の創始以來の一  
大事業として、人間の頭腦と努力とが利用しうるあらゆる科學文明  
の最も大なる試演の一つとして天下の耳目を聳動せしめんとしつゝ、  
あるものであつて、福島町一哩の下流、王瀧川の合流點から國境迄  
凡そ二十哩の間木曾川の本流を全部喰ひとめてそれによりて得べき

約十萬基の動力を百五十哩を隔てたる大阪市場に送らんとする殆ど破天荒の大事業である。無論この計劃は理論の上からは充分に可能なことであり現に合衆國に於けるナイヤガラ瀑布のその如きは十數萬基の發電機を動かし我國に於てもかの猪苗代水電が百四十哩の送電に成功しつゝあるを見れば現在大阪府下に於て用ひられつゝある十萬基の各工場の電動力が不經濟なる火力電氣を離れて早晚この新らしき電力に依ることは充分に信じらるべきことではあるが、それと同時に長く木曾人の誇として來たところの山河自然の風光、殊に今は國家的名勝の一つとして數えられつゝあるかの寢覺、棧等の勝地が一朝にして磊々たる石河原と化し終るべきことも亦考へなければ

ばならないところである。——といふのは、この附近に於ける木曾川の低水量は毎秒の流水約五百立方尺、即ち五百個にすぎざるに對して會社の計劃使用量は實に八百乃至千二百個といふ多數に上つて居るのであるから——そしてそれと共に更にいま一つの困難はこれによつて従來行はれて來た木材の河下げが絶対に支障を來たすといふ點にあるのであつて、會社の設計は之に對して幾多の墜道と溝渠とによる八十分一勾配の徑二間餘の新設水路を通じて何等の支障なく必要の地點迄木材を流下せしむべき方針であるが、洪水に際して流出したる材木の收容その他幾多實際の問題に就いて種々の困難の生ずべきは等しく専門家の苦惱しつゝあるところである。

吾等は今茲に於てこの國民的大事業の能不能或はその是非如何等に就いて論ずる餘裕を持たないのであるが藉りに斯くの如き大事業をば所謂國家經濟といふ大まかな見方に立つて善意の歡迎を現はしかつその成功を望むものとして更に木曾人のために一計を獻じたいと思ふのである、といふのはかくして得たる殆ど無限の電力の一部を割いて、多年の懸案たる飛彈の開發に資せんとするの一事である。

この企ては實に飛彈人のためのみならず將又これが關門たるべき木曾人の爲めのみならず同時に以て北陸線と中央線とを最も經濟的に結ばんとする國家的大目的と一致するものであつて、現在既成鐵道の各驛より北陸線富山驛よりのそれと共に飛彈の高山に通ずべき

最も經濟的線路の第一として疾くより福島町より三岳村を通過し野麥街道に合するところの捷路は長く識者の間に懸案として論ぜられつゝあるところの問題である、然しながら御嶽山麓を迂回すべきこの豫定線は長峯峠の急勾配によつて到底蒸氣鐵道のよくしうべきところにあらざるものとして寧ろ中央線中坂下或は中津川を以て飛彈の咽喉たらしめんと第二計劃に望みを置かんとするものゝ如く較もすれば吾が木曾谷は永久に封建制度の破壊と共に廢滅の悲運に沈淪して救ふべからざるに至らんとしつゝあるのである、此の時に當つて突如として傳えられたる如上の大計劃は實に木曾人のとつて以て永遠に自ら及びその子孫を經濟的に蘇生せしめんがために、委す



べき慈悲深き天の最も大なる賜物ではなからうか、而して斯くの如  
 き千載一遇の場合に際會して吾等はかの尊き大自然の藝術の見す見  
 す破壊され行くを救はなければならぬと共に、同じ時に於て吾等  
 及び吾等の子孫の爲めにこの大計劃の實現を期待せねばならないと  
 いふのは如何に皮肉な舞臺面に於て吾等自らがその演技者として苦  
 しまなければならぬかといふことを最もよく説明するものではな  
 からうか。



馬市の圖

木曾駒

日本の三大馬市——木曾谷年中行事の随一——花嫁花婿の新婚旅行——懐中をふくらませた伯樂——木曾馬改良論

木曾の馬市は遠い寛文の時代に起つて今に至るまで毎年七月初めの半夏の頃と九月中旬に中見と稱する市と二回づつ、青木河原と呼ばれる福島町の北郊で催される。鳥取縣の大山市や福島縣の白河市と並べられて日本三大馬市と呼ばれて山ばつかりの木曾にとつては一年中の大書入れ時、町には盆と正月と同時に來たやうな景氣のよい風が吹き廻して、木曾川べりの猫の額のやうな狭い空地には、活動や又大仕掛けの輕業から教育参考と金看板をかけた蛇の見世物までが、ぎつしりと小屋をかけて、年中山ばかり見てゐるこの谷の人々の好奇心を唆り立てる。町の賑ひはこのあたりからはじまつて木曾の谷には見られないやうな敏捷な眼付をした人達や、生れて始

めて見る人間の大きな群集に驚畏の眼を腫く男装した山の娘などが  
雑沓の中を往たり、來たりしてゐる。

懸て追々に集まつてくる谷中の馬の輩、骨格が小さな上に二歳といふが普通なれば、まだ人間ならば十二三といふいたいけ盛り、今日愈親の手許を離れて半玉に賣らるゝ身とは、知つてか知らずしてか三里五里といふ山道を健氣にも温なしく二三、五六、別に手綱もつけられずに一人の馬子に曳かれて遙々と身を苦界に沈める爲に出かけてくる、おはれ葱籠たる佳木の下に寝ね、縁縛たる豊草を敷いて通るとなき大自然の懐に育くまれたるいぢらしきものよ。庶莫かくして美しき自然の間に自由に成育せられたればこそ、

その美はしき温順の天性によつて、今日の市場に逸早く花嫁花髻の誇を克ち得るのである。市場ではこれらの花嫁花髻が、木曾川を背景として、穀助だの越中勘だの田中だの、山下だのと家號と紋所とを朱や紺地に白く染抜いた幾流れかの大旆や小旗が宛ら戦陣のやうに河原一面に立竝べられたその間に幾棟となく建てられた假廐の中に、背と背、腹と腹と擦合ふまでにぎつしりと追ひこめられて、細長い漏斗のやうな共同飼馬桶から、仲よく秣をわさつてゐる。と、各國から馳参したる伯樂共は、いづれも大家の旦那のやうに、大きな財布に懐を膨らまかせて、單衣の袖に涼しい新緑の風を胎ませながら、何百といふ厩をぶらぶらと見廻はつて歩く。右も左も一樣

に細長いほそながのんべりとした何れいづ異らぬ間拔顔まぬけがほばかりではあるが、これらの商賈人の眼には矢張り堅氣かたきだとか辛棒しんぼうよいか横着わらちやくだとかいふ馬相ばさうが判ると見えて、忽ち彼方の厩うまや此方の厩うまやから一匹二匹と引張り出される。先づ一通り足の歩き具合から關節の鹽梅、それが濟むと次は口と尻との検査であるが、馴れた伯樂の眼には何千何百といふ厩うまやの中で一眼通りすがりにそれと瞰んだのは百發百中、決して違算あさんがないといふことである。かうして見込が立つと今度は直段の相談さうだんとなるのであるが、これが亦面白い見もので、持主と周旋人たる伯樂とは互ひに長い袖の中から手と手を握み合つて指の數で幾何と決める、この方法は古い時代には何處にも行はれたことであるが

今日馬市場として残つて居るは本會ばかりであると言はれて居る、かうして大抵は二割乃至二割五分はこの袂たもとの中で闇から闇に葬られて仕舞ふので購買者の不便利益は決して尠すくなくない斯くて愈表向きの値段が決まると、そこに居合せた人達は十人でも二十人でも一緒になつて、シアンくくくと三度續けて手を拍つて漸く馬一匹の縁組が出来ることになるのであるが、それから先きがまた中々で賣られた馬は直に停車場に運ばれて新婚旅行まがひの汽車旅行、六頭積みの荷車に駒ならば十頭位は積込まれて、毎日三十車四十車位宛、特別輸送を始められるのであるが、これは御嶽登山團隊と共に福島驛の大きな年中行事の一つとなつて、行先きは多く愛知岐阜靜